

天正十一年八月十八日

貳百石

何鹿郡

田下村

百五十拾石

同

山家村

百五十石

ひろと郡

氷上村

五百石

惣七分

西足立村

以上

次

秀勝(花押)

天正十一年八月十八日

赤尾孫介殿

以氷上郡新郷之内、五拾石餘令加増之畢、全可知行之狀如件、

天正十一

次

八月十八日

秀勝



赤尾孫介殿

本願寺ノ僧素休、上杉景勝ノ將千坂景親等ニ書ヲ遺リテ、越後滯留中ノ厚誼ヲ謝シ、光壽教如ノ音問ヲ景勝ニ轉旋センコトヲ依囑ス、

大石元綱  
越後ニ下  
著ス

〔矢野文書〕

今度御使僧被差候付而、其表御様子承届候、祝著仕候、大播無事御下著候由珍重存候、此方之様子彌相替事無之候、可御心安候、彌以大守様へ御取成之様奉願候、誠ニ在國中種々御懇志之段難申盡候、何様與風罷下、御禮可申入候、此表之儀具可申入候とも、此御使可被仰入候條、不能詳候、景勝様へ新門主與御音信申され候間、万端取成頼申候、何後可申入候間、向後御馳走可希候、猶期後音候、恐々謹言、

八月十八日

素休

桐澤但馬守殿

黒金上野介殿

須田相模守殿

千坂對馬守殿

○光壽、越後ノ門徒ヲシテ、景勝トノ間ヲ轉旋セシムルコト、七月二十三日ノ條ニ見ユ、

上杉景勝、越後新發田城主新發田重家ト八幡ニ戰ヒテ、之ヲ破ル、

天正十一年八月十八日

九一三

九一二



天正十一年八月十八日

九一四

〔歷代古案〕 九

昨十八、諸侍至于赤谷差遣之處、新發田八幡表(北播磨)へ乘向、數刻防戰互不決雌雄之條、吾分爲目聞差越之處、様子慥見届、安否之勝劣速達聽聞候間、任其意、自身乘懸候處、旗本之士卒引具、最前覃鎗鋒、忽逆徒突崩、得大利候事、武功之勇者別而感入候、何様手透之刻一廉可令勸賞候、謹言、

天正十一年

八月十九日

景勝

小倉伊勢入道殿○上杉年譜伊勢守ニ作ル

〔本多家分限帳〕

賀○加 百五十石 原采女 歳六十 本國信濃

一越後柴田因幡、景勝へ敵を仕候時、八幡と申所と而合戰有之候、首一取申候、景勝内小倉民部、山先五郎右衛門存候事、

○景勝、新潟ヲ攻ムルコト、五月七日ノ條ニ見ユ、

筑前立花城主戸次道雪鑑、同國岩屋城主高橋紹運鑑ノ子統虎ヲ養ウテ嗣ト爲シ、立花城ニ居ラシム、

〔立花記〕 八道雪公立花守城之事

同八月十八日ニ、紹運ノ長子統虎ヲ養テ嗣トス、立花左近將監トソ名乗ラセケル、○上略

〔立花近代實錄〕 大圓公 天正十一年、十五歳、

八月十八日、自岩屋移城立花、

〔立花家譜〕 鎮種 天正十一年癸未八月十八日、長男統虎ヲ立花鑑連懇望

ニヨリ養子トナス、オモフコト有テ、瀬戸口十郎兵衛一人付添遣ス、

〔立花系傳〕 六 宗茂公 同年十月廿五日、爲道雪公之養子、來立花城、號立

花左近、以間千代女爲夫人、臣瀬戸口十兵衛、木田久作從焉、○立花系傳鑑連

ノコトヲ

○統虎、鑑連ノ嗣トナルコト、年月未ダ詳ナラズ、姑ク立花記及ビ立花

家譜ニ依リテ、茲ニ掲グ、

〔參考〕

〔高橋紹運記〕 十七統虎公鑑連公御養子にて立花へ御入城の事

天正十一年癸未八月十八日、左近將監統虎公を鑑連公御大望にて御養子に相濟、立花に御登り被成候か、紹運公御賢慮の事ありて、侍中間共なく、瀬

天正十一年八月十八日

九一五

高橋紹運  
瀬戸口十  
兵衛一人

小倉伊勢  
入道ノ戰  
功



ヲ從ヘシ  
ム鑑連入道  
トシテ道雪  
ト稱ス

天正十一年八月二十日

九一六

戸口十兵衛と申侍唯一人御供に付まいらせらる、立花一家の安堵大悦不  
過之、各御一家長臣中老まで、皆不殘御迎に罷出るなり、然ハ鑑連公も其比  
より御法體を被成、道雪公と申たてまつる事、

〔岩屋軍記〕

○碩田叢史  
三十三所收

天正十一年八月十八日、岩屋の城主高橋紹運の

嫡子左近將監統虎を、立花鑑連大望よよつて養子とし、立花と遣さは、紹運  
より瀬戸口十兵衛と云士壹人供と付、立花と送らる、其外士中間一人も付  
られ、去年十月六日、紹運、鑑連兩將穂郡(深野カ)と打出、秋月ウ兵と戦勝て、首數七  
百餘討取、此時統虎十六歳にて初陣ありしが、其勇氣を鑑連見付て、其比よ  
り養子とせんと思われしと也、統虎を養子とせられし比ハ鑑連も剃髮し  
て、道雪と號と、○朝野雜載  
異事ナシ

二十日、已京都奉行前田玄以、山城下白川ノ諸役ヲ免除ス、

〔天正十一年折紙跡書〕

下白川之事、(親王親主カ)親王様御料所御一職付、夫役并諸役等之儀、一切不可在之條、可  
被成其意候、恐々謹言、

天正十一

一職

八月廿日

救庵  
床下

救庵

當郷之儀、親王様御料所御一職付、夫役并諸役等之儀相除候條、成其意、於御  
科所方之御用者、夫役以下、及諸事油斷仕間敷候、次號被官家來、他所出入  
一切可停止者也、

天正十一

八月廿日

下白川

名主百姓中

船越景直、河内金剛寺ニ居屋敷及ビ山林竹木等ヲ寄進ス、

〔金剛寺文書〕

(編纂校封ハ巻)

船越左衛門尉

天野三綱

御同宿中

景

爰許へ令入部候處、當寺中御馳走之事候條、各居屋敷之儀令寄進候、彌御馳

天正十一年八月二十日

九一七

景直ノ入  
部居屋敷ノ

被官  
家來



寄進

天正十一年八月二十日

走可爲祝著候、恐々謹言、

天正十一

八月廿日

景(花押)

天野三綱

參

(御裏控封ウハ書)

天野三綱

御同宿中

船越左衛門尉

景

山林竹木  
ノ所望ト  
寄進

當寺山林竹木之儀付而、種々懇望之事候間、令寄進候、然上者、向後別而御馳走專用候、但寺中對我等覺悟相違之時者、可爲各別候、恐々謹言、

天正十一

八月廿一日

景(花押)

天野三綱

參

○秀吉、領國ヲ諸將ニ頒チ與フルコト、八月一日ノ條ニ見ユ、

佐々成政、越中立山權現ニ社領ヲ寄ス、又其老臣佐々與左衛門尉ニ婦負、新川二郡ノ地ヲ與フ、

倭高

子院

〔河井氏聞書舊題〕中○越

立山權現勤行無懈怠旨、被申越之通承届候、彌不可有油斷候、就中立山之儀、從神代依無其隱、諸堂建立并祭禮、如先規可被入精之趣、廿三人之請判得其意候、就其爲新寄進、岩倉之内三百俵、以寺田之内百五拾俵、合四百カ○五十脱、武家事紀三十五、俵トアリ、俵分不可有異儀候、若堂塔橋以下大破ニ付而者、可被相届之旨、急度可申出候、仍狀如件、

天正十一年八月廿日

佐々内藏助成政

院主御坊

室堂本願

長吏御坊

圓林坊

蓬門坊

千光坊

花藏坊

楞嚴坊

常住坊

財知坊

中道坊

惣持坊

明靜坊

玉藏坊

日蓮坊

無勒坊

實犯坊

一乘坊

玉林坊

六角院

○越、後行囊抄、  
六角坊ニ作ル、

以上廿三人

○加能越古文、武家事、  
紀所載ノモ、大抵同ジ、

〔土佐國蠹簡集殘編〕四○土佐

天正十一年八月二十日



天正十一年八月二十日

知行方目錄事

- 一六拾七俵之所 婦負郡堂村寺井谷
- 一四拾五俵之所 同郡禰の上村、北谷村、そて村、谷村
- 一參百六拾俵之所 同郡西きり谷、東きり谷、赤藏
- 一參百參俵之所 同郡黒瀬内宮の越、村上、黒瀬、小原、瀧之き
- 一參百六拾六俵之所 同郡黒瀬村
- 一四九拾貳俵之所 同郡黒瀬内岩屋村
- 一四八拾俵之所 同郡黒瀬内小永谷、兩むらい
- 一六百貳拾壹俵之所 同郡下篠原村
- 一貳百九拾俵之所 同郡上篠原
- 一貳百五拾俵之所 同郡石河原村
- 一八拾五俵之所 同郡井波村
- 一貳百八拾貳俵貳斗所 同郡之谷、こがこ
- 一五百四俵貳斗所 同郡下條
- 一貳百六拾俵之所 同郡小泉村

知行分  
夫分

織田玄以  
磯邊李齋

- 一五百五拾四俵之所 同郡こぶく
- 一六百拾五俵之所 同郡田嶋
- 一六百七拾參俵之所 新川郡西大森
- 一千五百俵之所 婦負郡さくら村
- 已上七千五百俵者、
- 一貳千五百俵者、 本地分

都合壹萬俵者、

右全知行不可有相違候、次知行にけ夫分之事、相給人、令相談、應高代無甲乙之様百姓に申付、可取分之、其上成政に相尋可爲落著者也、仍狀如件、

天正拾壹八月廿日

成政(花押)

與左衛門尉殿

二十一日、庚午前權中納言山科言經、山城、攝津ノ知行分ノコトヲ、京都奉行前田玄以ニ訴フ、

〔言經卿記〕四 八月十九日、戊辰、天晴、

一織田玄以へ地行分事可申間、先家中磯邊李齋ニ罷向、申談了、本能寺向、村

天正十一年八月二十一日



天正十一年八月二十一日

井春長軒舊宅也。○下

廿日、己巳、天晴、

一西梅津橋本孫介來了、鮎廿持參了、去年之年貢算用之事、堅可仕之由申、○

下西梅津年貢ノコト、訴訟ノ新知ノ分ナリヤ  
否ヤ未ダ詳ナラザレドモ、姑ク茲ニ採録ス、

一磯邊李齋へ鮎廿遣了、

廿一日、庚午、天晴、

一織田玄以へ西梅津地行分事ニ付而罷向了、鯛五持了、則對顏了、文書如此、

磯邊ト談合了、

山科家雜掌申

西梅津新地行參十石分之事、去天正七年三月二日、故大納言死去候、則

言繼ノ薨去ニヨリ返上ス

禁裏ノ長下代等ノ入信メテ申掠ス

(復)上様へ女房衆參御朱印返上申候處、御上洛候て可被仰付之由御座候つる條、御上洛ニ重而申上候へハ、則故大納言ニ被下候御朱印之旨、此方へ被下候而ヨリ以來、當知行無紛之處ニ、禁裏様御下代衆、上様御倉入ト筑前守殿へ申掠、去年十月廿六日被相押候、所詮當知行否之儀、以請取茂可相見候歟、此旨可然様ニ御取合奉頼存候、

天正十一年八月廿一日

半夢齋

大澤右兵衛大夫 重延判

廿九日、戊寅、天晴、

一磯邊李齋へ罷向了、地行分事談合了、

卅日、己卯、天晴、下未

一万里小路、大藤入道、菊亭、山本孫二郎等來了、其子細者役所事談合了、今日

秀吉大坂ニ在リ

大坂へ羽柴筑前守申云々、

一磯邊李齋へ罷向了、談合子細有之、

九月七日、丙戌、天晴、

一早朝ニ冷泉へ可來之由則罷向了、本願寺ヨリ興正院西御方ヨリ返事共

有之、昨夜冷小者上洛了、朝殮有之、暮ニ又罷向了、北向同被罷向了、

十二日、辛卯、天晴、晚小雨、

一早朝ニ織田半夢齋玄以へ罷向了、雖然不對顏、罷歸了、次山孫平次へ罷向

了、織田御次内藤懸三藏へ書狀遣了、頼入之由申、

尙々、龜山へ必可參候間、萬々御馳走頼申候、

言經身上ノ羽柴秀勝ノ三藏ニ依頼ス

天正十一年八月二十一日



天正十一年八月二十一日

九二四

態一筆令啓達候、仍大坂へ罷下、尤御禮等申入度候へ共、遠路之間、乍自由延引申事候、龜山へ御歸あされ候時、必々可參候、御引まひし候て、身上之儀、諸事千万々々奉頼存候、殿様へ可然様ニ可預御取合候、猶以面展之時可申候也、恐々謹言、

九月十二日

言經

藤懸三藏殿

十九日、戊戌、天晴、

一西梅津ヨリ、去年未進五斗持來了、

廿二日、辛丑、天晴、

一冷泉へ罷向了、身上之儀本願寺ヨリ使者昨日上洛、河野越中入道來云々、晚景又冷泉へ罷向了、

廿三日、壬寅、天晴、

一就身上之儀、冷泉、四條、河野越中入道等同道、玄以へ罷向了、本國寺ニ普請之由有之間、則罷向了、○秀吉京都ニ新邸ヲ營ム先河野ノ案内、筑州内淺野彌兵衛尉折昏相渡了、次對顔、一盞有之、折昏如此、

本願寺使者光  
佐野越中  
河野上洛

本國寺普  
請  
淺野長吉  
ノモ身ヲ  
依頼ス

以上

態令啓送候、仍冷泉院殿、山科殿、(爲備)四條殿、就御身上之儀、河越上洛之事候間、別而御肝煎奉頼候、恐惶謹言、

淺野彌兵衛尉

九月十九日

長吉判

玄以公人々御中

曇花院殿へも、同事ニ彌兵衛ヨリ書狀有之、

一大和宗恕へ罷向了、留守了、歸路ニテ河野越中入道ニ對顔、其ヨリ冷泉へ同道了、河越、紹巴連歌罷向了、其謂者、各身上之儀付而、本願寺ヨリ被申、玄以ニ取合可有之由也、則談合子細等有之、次一盞有之、

廿九日、戊申、天晴、

一西梅津橋本孫介來了、年貢算用了、

十月三日、壬子、天晴、六蛭日、

一冷泉へ可來之由使者有之、則罷向處、本願寺使者河野越中入道來、身上之儀半夢齋玄以馳走之由有之、申渡之禁中へ玄以ヨリ可申入之由、中山ト

天正十一年八月二十一日

九二五

冷泉爲滿  
四條隆昌  
等ノ身上

光佐ヨリ  
言經等身  
上ノコト  
ヲ玄以ニ  
依頼ス



天正十一年八月二十一日

九二六

白川トニ相談云々、各令談合、可披露之由有之、大略可然之由申サル、云々、則禮ニ罷向之處ニ、妙顯寺普請申付、幸有之間、則對顏、冷泉、四條、河野越中等同道了、茶子有之、先冷泉ニテ一盞有之、次竹田法印(定加)ヘ河野同道、予計錫持、罷向之處、他行云々、申置了、身上地行等事、玄以ヘ可口入之由有之間、罷向了、

一河野越中明日可下向由有之間、扇子十本遣了、冷泉ヨリ五十疋、四條ヨリ扇子五本也、興正院西御方ヘ書狀又箏譜遣了、内々所望也、又本願寺北御方ヘ禮文三人ヨリ書狀調之下之、身上之儀種々馳走也、

五日、甲辰、(寅カ)下未、晚晴、

一竹田法印ヘ罷向了、身上之儀地行分事申、一盞有之、

七日、丙辰、天晴、

一竹田法印ヘ地行分身上之儀頼入之由、書狀遣了、

八日、丁巳、天晴、

一西梅津當所務内券(檢)ニ、大澤右兵衛大夫、小川善大夫遣之處ニ、政所孫介令他行了、

九日、戊午、天晴、

一西梅津ヘ内券ニ、大澤右兵衛大夫、小川善大夫、小者孫右衛門尉等遣了、入夜歸了、

十日、己未、天晴、

一竹田法印ヘ罷向了、内々申候段頼入之由申之、對客之間、無見參了、次山田孫平次ヘ罷向了、對顏申合子細有之、

十八日、丁卯、天晴、

一西梅津橋本孫介來了、年貢事也、  
一半夢齋玄以ヘ罷向了、茶子ツクネモチ也、磯邊李齋ニ扇子三本遣了、入夜對顏了、

十九日、戊辰、陰、

一竹田法印ヘ罷向了、他行云々、

一玄以ヘ罷向了、客來之間不及對顏了、磯邊李齋ニ逢了、知行分事申、重而目安上了、如此、

先度如申入候、西梅津已下、去八月廿一日文言也、不及記之、李齋ニ折昏遣

天正十一年八月二十一日

九二七



天正十一年八月二十一日

九二八

了、如此、

貳石

西梅津卅石分、當所務相調次第渡可申候、

大澤右兵衛大夫

天正十一年十月十九日

重延判

李齋參

廿日、己巳、天晴、

一西梅津へ取納ニ遣了、大澤右兵衛大夫、今橋二衛門尉、小者孫衛門尉遣了、

小川善大夫可遣之處、彼存分不相濟之間、冷侍二衛門尉雇之、

一冷泉へ暮ニ罷向了、

廿一日、庚午、霜晴陰、

一西梅津ヨリ大澤已下歸了、且納了、

廿二日、辛未、天晴、

一玄以へ罷向了、知行分事申分ニ、明日大坂下向、然者懸而上洛之刻、可糺明之由、李齋申渡了、

西梅津ノ  
取納

玄以大坂  
ニ下向ス

一幕ニ冷泉へ罷向了、次冷泉來談了、

廿四日、癸酉、天晴、

一磯部李齋へ書狀、山田孫平次御玉へ書狀等遣了、

廿七日、丙子、

一西梅津へ、大澤右兵衛大夫、孫衛門尉等遣了、

一幕ニ冷泉へ罷向了、一盞有之、

廿九日、戊寅、天晴、

一梅津ヨリ孫衛門歸了、

十一月一日、己卯、天晴、

一大澤右兵衛大夫梅津ヨリ歸了、

四日、壬午、天晴、

一山田孫平次妻 御玉、へ罷向了、談合子細有之、フノヤキ食籠遣了、次玄以へ、

磯邊李齋ニ對顔事有之間罷向了、乍去他行也、罷歸了、

七日、乙酉、天晴、陰、

一玄以へ罷向了、地行分事申、對顔了、次山田孫平次人ヲ遣了、○本書、八日以  
後、明年九月マ

天正十一年八月二十一日

九二九



天正十一年八月二十一日

テ無シケ

九三〇

羽柴秀吉、攝津兵庫ノ商正直屋宗與ヲシテ、所領ヲ安堵セシム、

〔榎井文書〕

○攝津

當津内其方拘分貳拾貳石五斗事、令扶持畢、可全知行者也、仍如件、

天正十一

八月廿一日

秀吉(花押)

正直宗與

○兵庫船役ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔北風文書〕

○乾  
○攝津

兵庫船役之事、六月十六日、晦日まで半月分鑑錢、

合百六十貫文、

右請取如件、

天正十一年六月晦日

秀吉(花押) ○本書宛名  
切レテ無シ、

〔榎井文書〕

○攝津

兵庫船やく七月分の事

鑑錢

合參百貫文、

右請取如件、

天正拾壹年七月晦日

秀吉(花押)

兵庫正直や

宗與

〔北風文書〕

○乾  
○攝津

兵庫船やく八月分の事

合貳百八拾貫文、

右所請取如件、

天正拾壹年八月晦日

秀吉(朱印) ○本書宛名  
切レテ無シ、

〔榎井文書〕

○攝津

請取兵庫津船役事

合貳百廿貫文者、但九月分也、

右所請取如件、

天正十一年拾月八日

秀吉(朱印)

天正十一年八月二十一日

九三一



天正十一年八月二十一日

正直屋宗與

九三二

請取ひやうこふちやく錢事

合百五拾貫文 但十月廿六日まで分

右如件

天正十一年十二月九日

正直や宗與

秀吉朱印

遠江横須賀城主大須賀康高、同國高松社ヲシテ、社領ヲ安堵セシム、尋  
テ、普門寺ヲシテ、亦寺領ヲ安堵セシム、

〔中山文書〕

江○遠

遠州城東郡笠原庄之内高松御神領分之事、

右任先例、永不可有相違、田島、浦山、荒野、并塵取之船壹艘、如前々神主爲計可  
神納、惣別於神領分者、雖有他之競望、一切不可許容者、神事祭禮等武運長久  
懇祈、可抽精誠之狀仍如件、

天正十一年八月廿一日

松平五郎左衛門尉康高(花押)

笠原莊  
塵取ノ船

高松社

神主將監殿

〔普門寺文書〕

江○遠

遠州城東郡大淵西小谷普門寺領之事

合參拾七貫文地、

右寺家山林、并門前屋敷共、如前々永令寄附之了、然上者、自今以後雖有他之  
競望、一切不可許容、守此旨、堂寺勤行等不可有退慢者也、仍如件、

松平五郎左衛門尉

天正十一年八月晦日

康高(花押)

普門寺

二十二日、本願寺光佐、使ヲ攝津有馬ニ遣シ、物ヲ贈リテ、羽柴秀吉ノ  
起居ヲ候ス、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

城○山

一八月十九、筑州有馬湯治、爲御音信、道

服ニ、大樽 五、御使圓匠、石田左吉へ綿五把、増田仁右衛門綿五把、圓匠廿二

發足、廿七日歸寺、筑州廿七御ありト云々、

天正十一年八月二十二日

九三三

秀吉有馬  
ニ湯治ス

二十七日  
上リ



天正十一年八月二十二日

○秀吉有馬ニ入湯スルコト、本月十七日ノ條ニ見ユ、

九三四

〔附録〕

〔賀茂別雷神社文書〕

○山城

就令湯治爲音信縮羅二端、到來寔遠路之懇志祝著之至候、尙岡本宮内少輔可申候、恐々謹言、

筑前守

秀吉(花押)

八月廿六日

賀茂社

隼人正殿

出雲守殿

近江日野城主蒲生賦秀郷氏、西村重就二同國神崎郡ノ地ヲ給ス、

〔杜本志賀文書〕

○常陸

於御園郷岡田村百石、永代全可在知行者也、仍如件、

天正十一年

飛驒守

賦秀(花押)

八月廿二日

御園郷

西村(重就)左馬殿

安藝安國寺惠瓊甫瑤、大坂ヨリ書ヲ毛利輝元ノ老臣井上春忠ニ與ヘテ、吉川經言、小早川元總ノ上坂ヲ促ス、尋デ、佐世元嘉ニモ亦書ヲ與ヘテ、之ヲ促ス、

〔毛利家文書〕

三

追々被仰越候、存其旨候、吉田(輝元)、新庄(元春)頓ウケ廻可申候之處、老母所勞以之外候、今日も事之外振申候之間、難見捨、相延候段、言語之外候、

一然間、吉田ヘハ今朝使僧指上、條々申上候、林山内被申候ハ、吉田之御事者、銀山御引渡候之間、別ニ更御短束有間敷候、御供衆ハ大儀を被申候共、御

兩所御立候者、追々可罷出候、御請被申候ウラハ、延引之仁御座有間敷候、一元春様之儀、御分別肝心候條、今朝も飛脚進上候、其段も(吉川)言經信御立之事、來

月よも入候ハ、元總御事、先今月中ニ御乗船候テ、室、牛窓ニても御待合候様ニ可然トこそ申上候、來月五日六日之比ニ候者、更無申事候、私事ハ先御供難申候、其故者、上使先指下候歟、御著候者、押籠申候テ、境目先可請取之由可申候、殊更大船御乘候由候間、來月廿日より内ハ不可有御

天正十一年八月二十二日

九三五

銀山ノ引渡

元春ノ分別肝心

惠瓊隨行ヲ辭退ス  
秀吉ハ堺目ノ請取ヲ申出ス



ベシ  
惠瓊ノ母  
重感

秀吉へ進  
物ノ馬

秀吉ハ機  
嫌ヨケレ  
日上著ノ  
面ニモ對  
シ

秀吉へ進  
物ノ太刀

天正十一年八月二十二日

九三六

著候、大篇之御事候條、其分之旁御付候て、我等事ハ此度之儀可被成御免候、殊更老母煩散々式候、此度必死と存候間、出家とあされ候届て候間、取置共仕候て、上邊罷上候て不叶儀候ハ、其節以早船可被指上候、今度我等躰鉢ひらき僧上候てハ大事候、御大事さとき申あしく候、一うら十まで御調候て、首尾合さる衆可有御上候、私事ハ可被成御赦免候、一佐東邊之御供衆ハ、自吉田、元總成共、經信成共、何方ハ付申候へと御觸候ハ、其仁さ御さち候さるよ、一日も跡ハ立申間敷候、御兩所御上御供とごうり御觸之由候間、可被成其御心得候、吉田之衆ハ不存候、一御禮馬之事者、羽筑ハ一匹之事ハ、自爰許御上候てハ、筈ハあひ申間敷候、機嫌よく候ハ、御著其日も對面可被申候、若惡候ハ、其間ハ可有御尋候、其外ハ馬代可然候、御乘馬ハ急ハ御尋候共、御座有間敷候、今度ゆうハ、尋候へ共、無御座候つる、如形むどうあ程ハ候者、御上を可然候、それより劣候ても不苦候、一惣金具之御太刀ハ、御上を候てハと存候、何も手ハ取候て被見候、今度自新庄ハ信國之名物上リ申候、隆景様よりハ、見事あるとけ太刀上リ申候、

候、

一兎ハ角ハ、去年之二ノ舞猩々ノ亂ハ可罷成候、元清様と御下之儀も、さてハ若キ御旁、三日路を一日も五人十人にて御あるき有度事候、櫻尾も、此時縁リ公事(元總生母美氏)も大方様もおほしめし候や、元總さ御ひりきりも御若輩ハ無之候、餘老人之御思案にて候、一自新庄、明日ハ今晚ハ御返事可在之候、重々可申上候、高山ハ申候事も、今少存分不殘申上候、御機嫌惡候と存候、不苦候、御届迄候、向後目出候共、破候共、申上間敷候、此節まで候、吉田様へハ、輝元様御比興にて物をしとめされ候故と、書立進上申候、恐惶謹言、

安國寺

惠瓊(花押)

八月廿二日

井又右(井上春忠)  
御申之

(端裏切封ウハ書)

佐與三左(佐世元齋)  
御申之

一任

惠瓊

天正十一年八月二十二日

九三七

元春ヨリ  
ハ近日返  
事アルベ



若衆

相談容易  
ニ決セズ

開戦セバ  
敗北セン

堺目ノコ  
トニツキ  
隆景元春  
ノ欲心

惠瓊輝元  
ノ決心ヲ  
促ス

三十日モ  
遷延ス

天正十一年八月二十二日

九三八

夜前者被下醉、何なる儀申上候哉、可預御心得候、乍去、御若衆あごを随分呼出申候うと存候、

一 御相談之事、今五日十日に澄可申様見え不申候、羽柴存分者悉申上候條、私事今晚明朝之間可罷歸候、御案内申上候、

一 御弓矢に成申候者十二七八に可爲御負候、足もこの御用心專一に存候、一 境目之事、随分可然ほど調申候、隆景、元春此上よても欲心御座候て、御て候までも、手を少も御放有間敷も不存候、

一 兎に角に引切候而御縁邊之一儀あり、其段又障も有之物にて候條、御相談御延引候者、元總(小早川)可被指上候り、不然者、奉行衆一人充被指上候敷、此三ヶ條急度可被相澄事候、是の輝元様御口より出候て不叶事候、御家之儀、

隆景、元春に任被申あご候て、此一大事をも、今日明日に、碁將碁之勝負程に思召候て、乍恐不可然候、又被仰懸候て、被及異儀仁の、君臣之間に

の御座有間敷候、さて、物よの姿御事にて候、各の上之御意を相待、上この各被仰さぬを御待あり、とや卅日も郡御逗留、御弓矢之爲も、御家の

のさめも不成御事、無是非存候、

上方最眞  
ニテ申ス  
ズニハアラ  
秀吉ハニ  
シツ取ハ二  
ヲ好ムモ  
得テハ考  
睦ハ和  
策ニ富ム  
上方衆ハ  
敏捷ニシ  
テ經濟計  
策ニ富ム  
中國衆ハ  
鈍重ニシ  
テ經濟力  
ナク人ノ  
使方拙シ

一 如此申上候事、佛祖天道も照覽候へ、御使あご申候とて、上最負あごにて非申事候、羽柴者二つ取この弓矢仕より初候、乍去、和平弓矢之徳失の、和睦數寄にて候、早々右三ヶ條之被仰出、簡要奉存候、と、碁將碁之勝負程に此一大事を思召候と存計候、

上衆之儀の、

人數手より手とやき事、米錢、御一味中之武略の仕懸、彼是掌に持候、

此方の、

御人數少、御手うらの不存、手よふき事、米錢無之候事、御一味中不知事、御内衆不使事、以上、餘醉の儀、如何申上候哉、恐惶謹言、御披見之後、火中々々、

九月十六日

惠瓊(花押)

佐與三左 御申之

○經言、質トシテ大坂ニ赴カントシ、輝元、經言ニ書ヲ與ヘテ、其忠功ヲ褒スルコト、九月七日ノ條ニ見ユ、

二十三日、王信濃小諸守將大道寺政繁、上野ノ土福田某及ビ後閑又右衛門尉ニ書ヲ與ヘテ、地ヲ與ヘンコトヲ告ゲ、急ギ松井田新堀ニ移ランコ

天正十一年八月二十三日

九三九



天正十一年八月二十四日

トヲ促ス、

〔諸州古文書〕

信州

四通之内、八月廿三日政繁が  
後閑又右衛門之書狀一通

内藤下總守領地信州佐久郡野澤村  
持主 百姓兵之助

追而、彼知行方之儀ニ付而、御印判候間、其方爲心得進候、以上、

態令啓候、兩伴野惣社(麻部)ニ而之知行方、我々ニ御預ケ候、御證文參著候、然者  
先段如申理候、少々土貢方無相違候節、鍵衆有同心而、あままよく可被仰届候、  
爲其急度申候、將又松井田新堀(松井)へ御移候哉承度候、早々御移可爲肝要候、瀬  
豊へも此義申度候、恐々謹言、

駿河守

八月廿三日

政繁(花押)

福田殿

後閑又右衛門尉殿

二十四日、癸酉德川家康、甲斐ニ入ル、

〔家忠日記〕

三

七月十一日、辛卯、酒左より來六日ニ川中嶋へ御陣候由

申來候、○下略、家康ノ女、氏直ニ嫁スルコト

廿一日、辛丑、白(白根)より迄歸候、雨降、御陣來十二日迄延候、○家忠、領邑深溝ヨリ濱松ニ赴クコト、八月十五日

家康川中  
島ニ出デ  
ントス

日ノ條  
ニ見ユ、

八月大

□□、辛未、家康廿四日、甲州筋へ御出馬候とて、十三日、濱松へ越候、

廿五日、甲戌、雨降、家康昨日廿四日ニ甲州へ御越候、

○家康、甲斐ヨリ濱松ニ歸ルコト、十二月四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔甲陽軍鑑〕

五十

九 上略、家康女、氏直ニ嫁スルコトニカ、ルニ有テ、川中島へ家康御とらら

有べきとて、叶坊と云山伏乃使マテ、大藏大子藤十郎(長安)ニ家康被仰付、我  
等(三郎)を被召寄候へども、むつらいゆへまいらせ候、

一 信州侍大將あし(廣田)、眞田保科(正直)甚四郎、小笠原掃部大夫、諏訪下條(甲久)、ちく、松岡

屋代、各家康被官(定政)ニあふ事、前午の年大形如件、信州へあさる、家康譜代

の侍大將(康忠)、大久保七郎右衛門、菅沼大膳、柴田七九郎、信州乃内(康忠)、岩尾、穴

あや、前山、其外處々、家康手(昌世)まつりざる者共のあるを、甲州先方侍衆

差越給ふ、曾根下野、玉虫、津金一黨、駒井一黨、今福和泉、工藤一黨、遠山右馬

助、其外甲州先方衆、皆信州マて午の年より未のさしまて、度々のせり合

天正十一年八月二十四日

九四一

家康秋葉  
山叶坊  
遣シテ  
日惣二  
ノ召ス  
ト



曾根昌世  
横田尹松

高坂彈正  
衆ハ景勝  
ニ屬ス

氏政佐久  
郡ノ一揆  
送ニ糧食ヲ

甲信兩國  
衆ヲシテ  
シム平定セ

天正十一年八月二十四日

九四二

あて、其中小曾禰下野、横田甚五郎度々とまゝりめくゞ仕る、横田の殿武者  
あごを馬よてふみおろし、我類親のりうき者共ようふせ、或は今福求  
あご、云山縣三郎兵衛家中の若手の能者よを頸あごくれ候事、原美  
濃守り孫横田十郎兵衛子息よ似合ふる走廻のよし聞ゆふ也、曾禰下野  
内よて、山下部大夫と云侍、鎧を合ふる、高坂彈正衆を彈正組、同心被官と  
をふ、皆景勝の御被官よ成候故、甲州信濃の事、家康の模様よく川中嶋衆  
へきこゆるなど、

〔武徳編年集成〕

六十

八月二十四日、神君濱松ヲ御首途アリ、是ハ北條家

和融ノ上、表裏ノ奸計止スノ、信州佐久郡ノ一揆殘黨へ、上野ノ地ヨリ密々  
糧食ヲ送り、籠城ノ助力ヲ成スヲ以テ、吾兵今ニ成功ヲ遂サル故、御出馬有  
テ是ヲ殲サレ、其上ニテ川中島四郡ヲモ平均アラント、不日ニ甲州尊體寺  
迄御著、此地ヨリ信州佐久郡川中島邊ノ地圖ヲ畫カセ、專ラ御出陣ノ沙汰  
セラル、蓋シ兵法ニ蠻夷ヲ以テ蠻夷ヲ討シムル所以ニテ、去年秋以來、御譜  
代ノ士ハ一人モ副ラレス、柴田七九郎康忠ノミ監使トシテ、悉ク甲信兩國  
先方ノ士ヲ以テ、佐久郡勝間カ反ノ寨ニ據テ、折々鳥居、大久保、平岩巡視シ、

佐久郡ヲ  
平定ス

尊體寺

彼郡七箇所ノ敵砦ヲ日々攻サセラル所、各武力ヲ勵シ、武田直參石黒八兵  
衛、今井源次郎、矢崎助六郎等十八人命ヲ殞シ、其外班々ノ輩多ク死傷シ、七  
城ノ内岩尾、小諸、前山ハ先達テ攻拔、殘ル四箇所今年今月マテ殘ラス攻落  
シ、佐久郡平均ノ由、尊體寺マテ告來ル故、川中島四郡景勝押領ノ地ハ、重テ  
是ヲ平治セラルヘシトテ、御出馬ヲ止ラル、

〔甲州巡見記〕

功德山源正院尊躰寺淨土宗、京末、知恩院末、金ノ手町、東照神君天正十壬

午十一癸未兩年、御在陣之故寺、古城主武田左京大夫信虎、大永元辛巳年爲  
祈願建立、略中本尊靈寶眞向阿彌陀如來三聖之像、大唐善導大師眞筆、東照宮御厄除

御武運長久御祈願ノ本尊也

權現様ヨリ拜領之御團扇一本、涅槃像彌陀三尊、二幅唐思、來迎佛廿五菩薩

筆、御硯箱并硯石共、御經中將、御茶壺一、御卷物二本、下馬札、緣

起一卷

右之品々、天正十一年權現様御在陣之節、御寄附、

〔甲斐國郡志〕

天正十一年癸未八月、家康公來古府中、假宿于尊體寺、謁見武  
士及寺社之徒、各賜後證尊印、

天正十一年八月二十四日

九四三



天正十一年八月二十四日

九四四

家康ノ作  
ト傳フル  
和歌

家康上田  
昌幸眞田  
フ幸ニ與

伊賀者屋  
村ヲ守ル

有賀種政

八代郡市川村、家康公天正十一年未至于甲斐國、寄宿市川村之時、有御詠歌、  
さなきよにとふふのおやのはむしきに千鳥鳴あり市川乃森

〔創業記考異〕 三 八月廿四日、御仕置ヲ爲被仰付、公甲州ニ赴キ給、

信州上田城ヲ、眞田安房守ニ賜ル、○神君御年譜、御庫本三河記異事ナシ、

○家康、服部正成ヲシテ屋村ヲ、同保正ヲシテ岩殿ヲ守ラシムルコト、  
便宜左ニ合致ス、

〔譜牒餘錄後編〕 三十四 庶士以下之下 一天正十一 癸未年ハ、甲州屋村

之御城を半藏（服部正成）ニ被仰付、八月ハ極月迄在陣仕候、同服部仲ハ、岩戸之御城

ニ罷在候事、○伊賀者由緒并御陣

〔譜牒餘錄後編〕 三十四 庶士以下之下 一天正十一 癸未年、岩殿御城服

部仲ハ被仰付、八月ハ極月迄在陣仕、同年屋村之御城伊賀之者共被仰付、

在陣仕候事、○伊賀者由緒并御陣

〔武德編年集成〕 二十 八月 是月ヨリ、服部半藏正成、伊賀組二百人ヲ以テ、極月

マテ甲州郡内谷村城ヲ守ラシメ、同中保正保次、巖殿ノ加番トシ、先方ノ士

有賀式部種政ニ、同國成田四十四貫文是ヲ宛行ハル、或時尊體寺ノ旅營ニ

廣瀬三科ヲ召テ、信玄弓矢ノ極秘六箇條ヲ、神君十九歳ノ御時、故有テ粗聞  
セ玉フ由ニテ、下問ヲ厭ヒ玉ハス、委シク是ヲ尋玉フ故、高坂彈正カ甥春日  
惣次郎ヲ、秋葉山加納坊、大藏藤十郎長安ヲ以テ招カレシカ、所勞ユヘ來ラ  
ス、後日越後ニ隠ルト云、

島津義久、肥後ニ弟家久及ビ老臣伊集院忠棟、上井覺兼等ヲ遣シ、平田  
光宗ト八代ニ會シテ、俱ニ有馬救援ノコトヲ計ラシム、是日、忠棟、鹿兒  
島ヲ發ス、

〔上井覺兼日帳〕 十日 向 七月、

一十一日、如常、上原長門守殿（曾近）より、飲肥衆中上野壹岐守を以承候、此度鹿兒  
島へ御談合候、拙者養性氣ニ候間、不被召寄候、然ハ御談合之趣、具ニ御寄  
合中より、右之使者を以可申由候間、其分之通也、御談合之趣、八月入候ハ  
、必々肥州表へ御發足スルヘク候、然ハ日州衆之事ハ、中書公御手ニテ  
有ヘク候由也、兵船無足衆等、涯分進可申候由也、二町衆通ハ自分立、一町  
衆ハ二人被組候而可被立候、弓手火矢馳走、此外諸條如常、御働日限、御行  
等ハ、追而可被仰渡之由也、大略御行ハ肥州表之當作させら終ヘキ由也、

天正十一年八月二十四日

九四五

鹿兒島ニ  
於ケル會  
議

二町衆  
一町衆



天正十一年八月二十四日

九四六

有馬口あご、被申候衆も有之由也、意趣委承候而、御酒寄合候而使歸申候、○下略、覺兼宅酒宴ノコトニカ、ル、七月是月ノ條附録ニ收ム、  
一十四日、○中略、覺兼宅酒宴ノ條附録ニ收ム、カ、此日清武、田野へ安田主馬首を以、來月入候の、御出勢之儀、又御祭禮御供之事申候、兩所共こ被得其意候由也、

和田口道留ノ普請

一廿八日、池田志摩丞會尺仕候、從夫城のよく歸候也、此日衆中名々之人數揃候而普請也、和田口之道留之普請也、昨日吉利山城守殿鹿兒島へ參被成候こ、寄合中より御傳言候とて御座候趣の、御出勢之儀御闡下候條一定、來月中旬比の御進發可被成候由也、次この此度大風と殿中御主殿損候、遠殿上、肯當國より可仕之由也、御酒參會候也、○諸國大風雨ノコト、七月是月ノ條ニ見ニ、

八月

一 二日、如常、續衆あご出立候て、兒玉隱岐丞來候間、加江田衆へ申付候、此晚忠棟、親貞よりの御狀野尻傳こ到來候、趣の、來十日比佐敷表へ兵船可相揃儀定候、然の拙者被表へ十日より内罷越候て可然候様子、肥後堺目當稻可被拂せ候、又の田尻番替ふるへきの由也、此等之儀拙者罷越候て、

佐敷=兵船ヲ揃へテ覺兼等ヲ待ツ

悉皆下知御頼之由也、

一 三日、如常、腫物氣散々候間、看經あご不仕候、衆中各へ番立之談合共申候、此日茶的也、關治部少輔前よて候、可罷下之由候條、其分よて終日慰候、此日拙者船作を候、略、金剛寺僧、覺兼ヲ訪フコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、立候祝とて、加治木但馬丞紫波洲崎へ越候也、○

義久覺兼=馬ニ以テ命ルセシマキゾベズ

一 六日、御寄合中より承候、有馬表へ中書公御渡海可有之通被仰候、然者拙者も御頼候由也、中書公當時串木野へ御座候間、彼方へ先々被仰候て、御領掌あくの、追而日限此方への可被仰越候由也、○上下略、鹿兒島大風雨是月ノ條ニ收ム、

一 八日、如常、此日も天氣惡候而、的の無之候、此日佐土原へ岩崎刑部少輔よて、中書公有馬へ御渡海之由候歟、然者拙者御供之由鹿兒島へ承候、定而其方へも聞候哉如何之由、有川一閑齋迄尋申候、此晚岩刑被歸候、長野下總介八朔こ鹿兒島へ被參候、從夫串木野へ被參候へ共、去四日まての左様之儀、彼方へも御承候の、由候也、

一 十一日、○中略、覺兼射的ヲナスコトニカ、ル、本條附録ニ收ム、鹿兒島より此書狀入野まて來候由

覺兼使ヲ遣シテ有馬トシテ問フ

天正十一年八月二十四日

九四七



覺兼日向  
衆十日マ  
二到八代  
ベニ命著  
受ク命ヲ

覺兼部下  
命ヲ傳フ

紫波洲崎  
ニ赴ク

内山ニ出

龍造寺隆  
信田尻鑑  
種和ヲ  
提議ス

こ而、吉利殿の御持を候、則披見申候、趣の、寂前被仰候様、肥後御出勢  
之儀、日向衆同心を以可罷立候、然の來廿日八城へ越著、同心たるへき由  
也、從夫夜のいさしおき候て、各罷歸候也、

一十二日、諸所へ使書よて、續之様躰申渡候、勿論地下衆中へも申付候、此日  
奈古大宮司の興行之由定候つても、續之儀に付而指留候、然者海江田  
へ拙者罷越、續之儀等可申付所存候、左候の、終罷下候而、御酒給、直こ  
紫波洲崎へ可越候由承候間、彼方へ立寄候、種々會尺共也、其座過候而紫  
波洲崎へ越候、本郷より日暮候而、漸内山に著候也、

一十三日、内山より玄包す崎城へ參候、○下略、覺兼折生迫ニ至ルコ  
トニカ、ル、本條附録ニ收ム、

一十四日、(折生也)比比郎へ登候而、如宮崎可罷歸之由申候而、打立候處、内城  
中城よて祝言之御酒共種々被下候、其上圓福寺、御崎寺酒肴被持を、各自  
酌よて色々被成候間、沈醉候而、鹽時かところ惡候つを、漸此夜内山に留  
候、然處に宮崎より奥右京亮來候趣の、善哉坊鹿兒島より被歸候、續之儀  
の不相替候、併田尻表之儀かど矢野出雲介歸候に聞得候、龍造寺田尻殿  
へ無事之儀申懸候、其分之處、江之浦拵に人數を指越、又手色如寂前有へ

紫波洲崎  
ニ抵リ又  
野島ニ出

宮崎ニ還

宮崎ヲ發

田野ニ宿

高牟禮ニ

敷根ニ赴

白濱ニ著

き躰に見得候由也、彼是御談合候歟、各寄合中一兩日中打立之由に候へ  
ども、五日の可差延候する躰に見得候通承候也、扱の明後日十六、拙者打  
立可申覺悟候條、明朝宮崎へ可罷歸存候へ共、今少續相延候の、九平へ  
可登之由申候而、奥右宮崎へ歸候、十八日この必々打立候する由、衆中へ  
も申候也、

一十七日、紫波洲崎へ參候、同城よて種々御會尺也、從夫船よて野島へ越候、  
此晩も鹿に不合候、野嶋へ留候也、

一十八日、天氣惡候而、呼に不登候也、見籠させ候而狩仕候、鹿一ツ取候也、此  
夜如宮崎之罷歸候也、鷄之鳴候而歸著候、

一廿一日、肥後立之由候間、打立申候、遙久鹿兒島へ伺公不申候、其上此度御  
出勢御談合養性中よて候而、不承候間、彼是如鹿參上申候也、此晩田野へ  
留候、宿元へ地頭より酒肴持をられ候、

一廿二日、田野より高之牟禮へ著候、

一廿三日、高之牟禮より敷根へ午刻計著候、休世齋よて種々會尺共也、從夫  
彼方へ船頼存候而、向之嶋白濱へ著候、彼所にて月待候、此夜、月よ雲風の



鹿兒島ニ  
義久ニ謁

忠棟鹿兒  
島ヲ發シ  
八代ニ向

覺兼再ビ  
有馬渡海  
クノ命ヲ受

上ある心り取と仕候也、

一廿四日、殿中へ伺公申候、白濱次郎左衛門殿を以申上候趣、此度有馬へ渡海可申之由被仰付候、然、打立申候、春以來病中忝上意共候、其後不申上候條、彼是爲可申上參上申候由申候也、即御前へ被召出候、此度氣分笑止候様へ被聞召及候處、早々本腹、目出被思召候由上意候也、此日忠棟八代打立被成、當所衆も少々立也、上意中書公有馬へ御渡海之由候、然、拙者も渡海之儀御頼之由也、境目之儀候條、不及是非候、渡海可申候、併彼表御行等未完候、然、私渡海申候而も、彼方よて一途御用と難立存候間、誰寄合中今一人御渡候す、酌之由申候也、吉田作劔御使也、

一廿五日、出仕如常、御月次御連歌也、進藤殿も御出座也、此日打立候する覺悟候つ、御家門様御請共申候、進藤殿御隙入候間、明日請取可有由候儘、逗留申候、○下略、覺兼、醍醐寺ノ使僧ニ會スルコトニカ、ル、全文ハ三遺シテ、援助ヲ請フコト、三月十六日ノ條ニ見ユ、  
一廿六日、○中略、覺兼、義昭ノ使者進藤、筑後守ヲ訪ム、其後殿中へ罷出候、伊地知雅樂助息元服也、御酒二返目へ罷出候持參、雅樂助息御酌被參候、御

鹿兒島ヲ  
發ス

加治木著  
別當

義久平田  
光宗ヲシ  
テ覺兼ト  
共ニ家久  
ヲ佐ケシ

覺兼肝付  
兼寛ヲ訪

盃打立首途とて、拙者へ被下候、頂戴申候也、其後御暇申退出候、未之刻計出船候、其砌長谷場筑後守殿御酒預候、各暇乞へ御座候衆へ參會候、船本まで各被送候也、此晚加治木へ著候、別當へ宿申候、廳而御酒振舞也、肝付藏人殿拙者著船候とて被下候、又彈正忠殿より使者預候、早々城へ可罷登之由也、尤可參候へ共、船こゆられ候故よて候哉、氣分無爾々候間、明朝可參通申候而返し候也、將又今朝有馬渡海之由、拙者一人の斟酌之由被達上聞候、御返事之趣、一人渡海申候而も、諸下知等難閉目候通、尤へ被思召候、併當時八城見舞平田殿へ被仰付候、然、彼表人數被召列、(光宗)濃州も渡海之由可被仰候、然、兩人談合共仕、彼表之事宜様へ御頼之由共候、此上へ辭退仕へ不及候條、乍勿論上意次第之由申上候、

一廿七日、早旦肝付彈正忠殿より使者預候而、早々可罷登之由候、廳而使者へ打列罷登候、即食振舞也、客居拙者、肝付雅樂助、次拙者、主居霜臺、次柏原左近將監、次肝付藏人殿、種々肴よて御酒也、三返め持を候酒參候也、肝付小五郎殿、其外一家衆も、各被罷出候、御酒也、拙者召列候者共、此も、座よて御酒給候、其後罷立候也、板井手川之邊まで彈正忠殿送とて、御酒



横川ニ著ス

持をられ、川の頭よて良久酒宴也、折節其ほとり乃木の上、烏の果報々々音信候間、門出目出ると互に戯候而、殊外之大酒也、從夫とうれ木地藏堂に憩候而、茶湯させ候而、暫沈醉ると醒し候、如此共候間、漸横川町別當所へ越著候而、此夜に留候、別當御酒振舞候也、此晚伊集院肥前守殿子息を以、城へ可罷登之由承候、尤可參候へ共、忠棟先と通よて候間、何として追付可申候條、此度の無禮に可罷過候由申候、夜入候而、伊肥御酒持をられ、拙宿へ御座候、閑談共也、

使ヲ新納忠元ニ遣シテ忠死ヲ慰問ス

山野ニ出ヅ

鬼利支丹宗

一廿八日、早朝打立候、柏原左近將監殿を以、伊肥へ拙者可罷登候へ共、夜前如申急候間、無禮申由申述候也、柏將大口よて破籠之御酒をと吞候處、追付候也、從夫柏將新武<sup>(忠元)</sup>刃へ進之候也、罷通候、尤參候而、刑部<sup>(忠元)</sup>大夫殿戰死之已後無沙汰申候段可申候を、忠棟先と八城へ通被成候間、拙者も急候而、無其儀由申候也、此日山野へ著候、夜前夢想と、ごふかくも頼む心お任すあり行衛をえらぬ浪の梅の香、有馬へ渡海之由共候間、彼方天神ととも鬼利支丹宗とるらんも悉破滅候儘、爰より此方之衆を守護ましますへき瑞相くと頼母敷存候也、此晚新納武刃より書狀并酒肴持を預候趣

の、今日城麓へ罷通候事不被知を候而、無沙汰之由候也、使者寄合候而、御酒給候也、懸而捻返事仕候也、

一廿九日、柏將、新武刃之返事被仰候、彼方まで使進之候、祝著之由也、殊と有馬へ渡海するべく候哉、吾々同心可有之候間、各御影を以、刑部追膳<sup>(忠元)</sup>有度由也、此朝未刻計打立候、此日久木野へ著候、懸而地下へ案内者頼候而、呼こ登候、此夜に山へ留候、

一卅日、早朝呼こ出候へ共、鹿に不合候而、るうて歸候、此日跡衆相待候而、久木野へ留候也、此晚も呼こ登候、鹿一ツ呼付候へ共、仕合悪て射外候、懸而宿本へ歸候也、

九月

一一日、如常、此日も日州衆相待候而、久木野へ留候、此晚呼こ登候而、山に留候、

一二日、山より歸候而、懸而打立、佐敷へ著候、亭主御酒振舞候、稅新介殿被來候間、參會候而給候、忠棟より書狀稅新被持來候、即披見候趣、此方よて拙者相待可有候へ共、先々順風次第如八代出船候、當の吾等事今少當所へ

久木野ニ到ル

鹿狩

佐敷ニ著ス  
忠棟佐敷  
ヲ發シ八  
代ニ向フ



地頭 隈城衆  
高江衆  
宮里衆

佐敷ノ地  
頭宮原筑  
後守覺兼  
等ヲ饗ス

覺兼兵ヲ  
佐敷ニ止  
ムベキヤ  
ハ代ニ送  
ルベキヤ  
フ忠棟ニ  
問フ

宮崎衆  
穂北衆

有馬右衛  
門等佐敷  
ヲ出帆シ  
テ有馬ニ  
渡ル  
川内衆

福島ノ地  
頭伊集院  
下野守八  
代ニ向フ

天正十一年八月二十四日

九五四

逗留申、西目之船廻來次第、軍衆渡海之儀見廻候て肝要之由承候也、彼書狀見候處、當所地頭宮原筑州被來候、隈城衆召列新納越州、高江衆召列川上十郎左衛門殿、宮里衆米良殿、松山市木小四郎殿、右之衆拙者著候とて御座候也、折節別當酒持來候間、各へ會參候也、此晚宮原紀伊守御酒持を被來候也、

一三日、別而毘沙門へ讀經等申候、宮筑より使て預候趣、晚氣御酒振舞可有之由也、爰元へ移被成候、無沙汰仕候間、御禮可有覺悟之處、結句可參之由承候、失本意候、兎角參候而可申述候由返事申候也、此日稅新宿よて、稅所宮内左衛門殿、有馬右衛門殿、碁被打候、見候、此晚宮原筑劔へ參候、飯振舞也、座客居拙者、次市來玄蕃左衛門殿、次柏原左近將監殿、主居稅所新介殿、次亭主也、拙者御酒持を候、酌共申候也、筑劔も酌共被成候也、夜深まで酒宴也、

一四日、如恆、忠棟へ書狀を以、爰元へ暫罷居候而、先衆渡海之儀共可申付之由候間、其分候、併今一艘も諸浦より廻船無之候、當の諸軍衆此方へ抑留候する哉、又八城表へ指通候する哉之儀共申候也、平田濃劔へも書狀を以、入庄祝言先々申候也、此日宮筑、稅新兄弟、有馬右衛門殿、拙宿へ被來閑談共也、碁共うさせ候而見申候、宮筑御酒持をられ候、各參會候、夕食各へ振舞候也、此日も船盛共申候而、明日有馬へ少々渡海之由申定候、此日宮崎衆少々被來候也、穂北衆被來候也、

一五日、如常、此日有馬右衛門殿出船候、類船に新越劔父子、川上十郎左衛門殿、桂神祇少輔殿、米良殿出船也、いづれも變之衆中同心也、此夜忠棟より返事到來候、先々川内衆、又ハ日州衆二三ヶ所も渡海させ候而、可然之由也、此日も宮崎衆少々被來候、

一六日、如常、稅新八城へ越申候、此度有馬へ就渡海之儀、存分共候儘、忠棟、光宗へ申候也、此日福島地頭伊集院野州人數先こ八城へ被通候間、我ハ小惱こ付而遲參候、彼方のとく被通由候而、拙宿尋候也、御酒參會、御行等之事、事と閑談申候、宮崎衆悉皆御指合候也、市來玄蕃左衛門殿、此日出船おり、宇都よりの船を載申候也、此日ハ宮筑州拙宿よて終日雜談共也、碁將碁あこさせ候て慰候、

一八日、藥師を讀經等別而仕候、宮筑酒肴持をられ閑談共也、敷根越中守こ

天正十一年八月二十四日

九五五



兵船佐敷  
ニ來ラズ

有馬ヘノ  
使者八代  
ニ歸ル

忠棟覺兼  
ヲ八代ニ  
招ク

發句

天正十一年八月二十四日

九五六

而忠棟、光宗へ兵船一艘も所々より不來候通申候、中書公舟より八城へ御通之儀聞得候、是又申上候、此日忠棟より書狀預候様子、有馬へ被遣候兩使昨日歸帆候、鎌筑、同雲彌彼方御行在さう、被申由也、田浦殿爰元逗留申候儘、自身被來候すとも候て、三男被遣候、御酒預候也、

一九日、如常、靈符之祈念別而仕候、忠棟より書狀預候趣、談合可有子細候、拙者早々八城へ罷越候へと承候、儒の諸軍衆之事、佐敷湯浦へ御打入候而肝要之由、稠可申付之由也、此日の宮筑へ禮儀申候、終日被館よて碁將碁あよて慰候、夕食御振舞候、種々會尺也、此日甌島殿舍弟御酒持を被來候、彼方よて兵船二艘到來也、又加世田船壹艘八城へ此間忠棟荷物被漕を、逗留申候、爰元へ拙者へ船點合候へと被仰付由申候而來也、將又日州衆今二三所渡海之由、先日承候間、今日穗北地頭渡揖之儀申定候處、又忠棟より日向衆渡船之事、今一兩日の可相待之由承候間、指留候、此日津奈木方水主六人來候、一兩日之調よて參候由申候間、曲事よて候、然々調相待候へ、此方よて時分可申候、今度の船三艘程廻候而可然候由申歸候也、此日任例菊乃發句仕候、たくとあき袖もや々ふの菊れ花、

覺兼佐敷  
ヲ出帆ス

德淵ニ著  
岸ス  
八代ニ入ル

覺兼家久  
ヲ平川原  
ノ宿ニ訪フ

忠棟及ビ  
光宗ヲ訪フ

有馬ヨリ  
迎ノ船來ル

一十日、如恆、片浦舟、小湊舟二艘來候、此日八城へ出船候、右之船二艘、甌嶋舟壹艘、已上三艘よて出船也、船中酒宴あよて種々慰候也、壹番鳥時分德淵ニ著岸候、鹽うらよて不滿候間、本船者難成候而、漁船之歸帆候と、吾々一兩人乗移、宿元へ著候也、

一十一日、如常、各今朝舟よて下候、荷物等持運候而、亭主御酒あよて振舞候也、柏將、野村大炊兵衛尉同船仕候也、此日中書平川原へ御宿候間參候、先し御振舞被成、其後御茶湯也、自身茶御立候也、柏將、野大へも御茶被下候也、其後忠棟宿へ參候、御酒參會候而、御行談合之儀あよ承候也、其後光宗宿へ參候、御酒參會候也、御兩所共と爰元へ宿直し候而可然候、懸候而談合可難成由候、然ハ麓荒瀬殿へ宿申候、此晚亭主食振舞也、平田殿よて自身御出候すれ共と候て、同名駿河守殿よて御禮也、此夜も忠棟よて書狀を以、兵船之談合共候也、

一十二日、○中略、忠棟、覺兼、光宗等、義久ニ甲斐宗運ノ無禮ヲ告ゲ、阿蘇此日有馬よて軍衆迎船來候間、穗北地頭渡海之由、佐敷へ申渡候、

一十三日、○宗運、島津氏ノ使、本田刑部少輔ニ禮セ、平田左近將監殿へ禮ニ

天正十一年八月二十四日

九五七



高山衆  
飯肥衆  
帖佐衆

有馬鎮貴  
津弟某島  
津義虎ノ八  
覺兼ノ八  
代入庄ヲ  
賀ス

天正十一年八月二十四日

九五八

參候、閑談共申候也、伊野州、上長、笏禮と御出候、御酒參會、種々雜話也、高山  
飯肥之衆中多々禮と被來候、帖佐衆も同前、一昨日就御談合之儀、飯野へ  
使被遣候、拙者衆中誰可申付之由候併佐敷衆中于今皆々差置候間、  
爰元同心衆ハ漸五六人候、其内ハ使候する衆無之候由申候也、此晚平  
田殿よ、明朝御酒寄合可有案内承候、御同名加賀守よ承候、光宗、覺兼等ヲ

一十五日、中略、忠棟、覺兼等、堅志田ノコトヲ相談、此日赤星殿禮儀と被來候、有馬殿舍弟是も禮儀と被來候、太刀百疋預候也、東尾張入道御酒持を被來候、松浦筑も御酒くをら候也、有馬殿よ書狀預候、從義虎も御狀被下候、何れも入庄辛勞之由也、

一十六日、如常、忠棟へ參候、有馬殿義虎へ之返書申候、中略、覺兼等、堅志田城攻ノコトヲ議スルコト等ニカ、ル、十月七日ノコトヲ收ム、此日忠棟よ承候當庄内田之事、去年春之比拙者屢申候キ、其後兵庫頭殿へ當所御賜候條相異候、又直ニ御覺悟候間、如元拙者屢申候而可然之由候間、平濃、笏へ御案内申候、尤可然之由候條、如其申付候也、忠平、八代ノ守將トナルコト、七月十一日ノ條ニ見ユ、光宗、八代ノ守將トナルコト、七月十一日ノ條ニ見ユ、

一廿二日、如常、忠棟宿よて終日雜談共也、（其下同シ）碁將碁と而候、此日山田新介殿著候也、從都於郡使者也、鎌田又七郎殿立おされ候す共、妻万御祭禮候間、鹿兒島へ被請御意、于今遅引候、さてハ此節立候する哉、い、之由承候、鎌雲今程有馬御番よて候間、彼方へ調儀等、然々被達、又七郎殿事ハ之と被居候而可然之由申候、衆中ハ立候而肝要之由申候也、此晚蓑田信、  
振舞也、

一廿四日、中略、覺兼等、堅志田ヲ攻ムルコトニ收ム、此日中書殿比志島殿著被成候也、

一廿九日、如常、忠棟宿よて將碁おとよて慰也、此日新納武州、猿渡越中守、平田狩野介、稻留新介來著之由候而、禮儀と被來候、各御酒參會也、

一卅日、如常、猿渡越州より猪預候、野尻地頭唯今著候由候而、被來候也、野村安房介來候、御酒被持也、此日宮原殿風呂燒せ候而入候、鹿兒嶋衆同心よて入候、（歳久）金吾様よて此方へ、辛勞申候由候而、御使僧被下候、御養性氣よて、此度續之事御遅引之通共被仰分候也、（証心）此晚右馬頭殿御著被成、御宿東四郎三郎處也、下略、合志親重、覺兼ニ使者ヲ送ルコトニカ、ル、十月一日ノ條ニ收ム、

天正十一年八月二十四日

九五九

家久八代  
ニ著ス

新納忠元  
等モ來ル

島津歳久  
疾ム



○新納忠堯等、肥前深江城ヲ攻メテ利アラズ、忠堯、戰死スルコト、六月十三日ノ條ニ、義久、光宗ヲシテ八代ヲ守ラシムルコト、七月是月ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔上井覺兼日帳〕

○十日 八月

八朔  
風流

一朔日、如常、衆中各被來候、御酒おと預入數も有之、皆御酒參會候、寺社家衆も禮儀被成候、籌茶おと預候、銘々こ御酒參會候、衆中征矢竹尻同數次第進上也、此日從柏田町踊來候、并風流共種々也、

若衆  
的

一三日、○中略、覺兼、船ヲ造ルコト等、此日金剛寺御上候、八朔禮儀おと御酒おと被持を候、

茶湯

一四日、如常、茶湯おと若衆達寄合閑談共候、從夫麓へ罷下候、暮的射候而慰候也、

茶湯

一五日、如常、茶湯的也、弓削甲斐介の前こ而候、罷下候而終日慰也、

一七日、如常、柏將、長淡、野大終日雜談共也、今日拙者各へ振舞的射させ候す覺悟候處こ、天氣散々候而、無其儀候、先々其御酒右之衆試有へキ由申候

彼岸入

而參會候也、左候而閑話也、○下略、主殿ノ、葺替板ノ切符ヲ諸所ニ課スルコトニカ、ル、七月是月ノ條ニ收ム、

一九日、如常拙者衆中への射さを申候、海江田よりも廿人計召寄候、都合弓數百張計候、酒飯おと終日慰也、夜入候而より棧敷おと亂舞也、殊外酒宴共也、此日四半加治木宮内少輔仕候也、

一十日、彼岸入おと候間、讀經別而仕候也、此日關右京亮の前おと候、罷下仕候、終日酒宴おと種々會尺也、此日泉鏡坊四半被射候也、

一十一日、讀經等前同、長友左衛門尉的張行之儀申候間、瓜生野へ罷下候、宮本弓場おと終日慰候也、酒飯おと殊外會尺也、金剛寺大宮寺おと御酒持をらせ候、見物候、此日四半又加治木宮内少輔仕候、夜的おと種々戲候

○下略、義久、日向衆ニ肥後出陣ヲ命ズルコトニカ、ル、本日上ノ條ニ收ム、

一十三日、○中略、覺兼、内山ヨリ紫波洲城ニ入、折宇迫假屋迎こ來候而、地ふくの濱こ一兩日前海鹿寄候おと、夫を肴おと、於中途御酒持參仕候也、於れより城へ參候、恭安種々御會尺共也、此晚折宇迫鹿藏へ呼こ登候、鹿こ不見合候而歸候、内城へ留候而、心靜こ恭安御物語承候也、

一十五日、内山野へ登候、是も鹿こ不見合候、此日九比良へ登候、此晚も鹿こ

狩獵



天正十一年八月二十五日 二十六日

九六二

不合候、野より思遣候、野邊の露月分りへる袂哉、おと申候、  
一十九日、衆中より拙者へ振舞的也、終日慰候也、

二十五日、甲戌岩城親隆、陸奥淨勝院ノ棟役段錢等ヲ免除ス、

〔岩城文書〕 ○中常陸

ちんへさいそく申候と付而、おひ言のうへ、重まての馬をも系しまいらせ  
候へく候、此ふの事の、自分よと立ふ匂い候やう候、殊こかり所○本書、別ノ  
書ヲ掲ゲテ、其處ニをれうちまへ之物ともむまやく田をんおと候多  
しく候、爲後日一筆進候へく候、かしく、

天正十一年

八月廿五日

〔印文親隆〕  
〔朱書〕  
〔岩城親隆〕  
實伊達晴宗男

常勝いんへ

二十六日、乙亥大和高取城主越智家秀、部下ノ爲ニ殺サル、

〔多聞院日記〕 ○三和 八月廿六日、

一越智玄蕃今朝生害云々、内衆沙汰云々、順慶昨日ヨリ中坊ニ、今朝於成身  
院茶湯在之、最福院へも被出了、筒井ニハ定テ存知歟如何、

順慶ハ中坊ニテ茶湯興行

九月十七日、

一越智又太郎、田中一類同道テ引退了云々、淺猿爲躰也、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕 ○山城 一和州越智玄蕃生害云々、八月下旬、  
ちの者共所行也、

○家秀、高野山西門院ノ關東ヨリ歸山セルヲ祝スルコト、五月二十日

ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔筒井諸記〕 和州郷土記 高市郡

高取玄蕃頭越智利之、高取山城知行二万五千石、順慶婚、四十八歳死、天正十二年十月三日也、

磨下 土佐、八木、飛鳥氏五千石、合テ二万石ナリ、

〔筒井諸記〕 言次硯

筒井祖慶公姪婿高取玄蕃頭越智利之、和田織部傳ニ云、城主トタリ、天正ノ比、高市郡

〔附録〕

〔高野山文書〕 ○西門院三

越知玄蕃頭家秀公、當院雖爲御宿坊、世々依如何成子細歟、音信中絶仕而已、

天正十一年八月二十六日

九六三

順慶ノ婚十二月十三日死ストノ説

家秀ノ宿坊西門院



天正十一年八月二十六日

九六四

于然我等正徳第貳辰之年中在勤之砌、嘆敷存知、越知氏之御系圖尋探之處、當時松平兵部大輔様御門葉之由承知、大慶不斜、當院代々之重寶家秀公御手翰ヲ以御願申上之所、由緒不淺之趣被聞召上、御歸依被成下條々如左、

西門院中興

快傳(花押)

松平清武

長昌院

德川家宣

松平清行

於保良方

御實父母 清楊院殿(德川家宣)

長昌院殿

文昭院殿(德川家宣)

松平兵部大輔清武公

御養父母 越知 圓珠院殿長昌院殿御妹

松平内藏頭清行公

〔德川幕家譜〕 乾 綱重卿

御部屋於保良之方、田中治兵衛ト云町人ノ娘也、天樹院殿奥勤松坂之局部屋方ニ勤、綱重公ハ天樹院殿ノ養分ニテ、松坂之局之部屋ニ而御盛長、於保

越智與右衛門

專光院

長昌院ノ傳系

良之方寛文二壬寅年四月廿五日、虎松君を産、後文昭院殿也、同四甲辰年、臘胎憚上、越智與右衛門ト云妻ニ被下、産後同年二月廿八日死去、出生成長後松平右近將監清武ト號、於保良之方專光院殿ト號、後長昌院殿、谷中善性寺江葬、御年二十八歳、寶永二乙酉年十月十二日、東叡山江葬、改諡有テ御法名 長昌院殿從三位大岳善光大姉

御別當 林光院

〔柳營婦女傳系〕 十五 文昭公御母堂 長昌院殿之傳系

長昌院殿の父は、田中治兵衛と云、兄は同利兵衛と云へり、姉は河原林善兵衛に嫁せり、此善兵衛始は伏見屋五郎兵衛とて魚店を設け、輕き商人なり、是に於て、河原林源右衛門、同清右衛門とて二子を産せり、然るに、善兵衛死して後、嫡子源右衛門代に成て、右の治兵衛、利兵衛ともに病死せり、殊に利兵衛は早世して跡斷絶す、故に田中家の女子兩人を源右衛門引取、厄介にし、其間に外叔母のお保良殿後長昌院殿是なりをば、兎や角して天樹院殿附の松坂局へ奉公に出せり、爰ニ甲府宰相綱重卿(德川家宣)は大猷公四十一歳の御時の御子なる故、天樹院殿御子分になされ、松坂の局の部屋にて御養育せられ、御成長

天正十一年八月二十六日

九六五



家宣ヲ生ム

越智與右衛門ニ嫁ス  
難産ニテ歿ス

長昌院ノ姉ヲ與右衛門ニ嫁セシム

天正十一年八月二十七日

九六六

の後、不計お保良を御幸遇有て、虎松君を文昭公産せり、時に寛文二年壬寅四月廿五日なり、又間も無くお保良懐妊ありし故、此度は御隱便の方こそしかるべけれど、松坂の局取計にて、越智與右衛門清隆妻に成し下さる、與右衛門迎入れ、懇懃に挨拶して一室に備て置しか共、難産にて廿八歳にして逝去あり、時に寛文四年甲辰二月廿八日なり、然れども御出生の男子は、別條なく段々成長あり、是則ち松平右近將監清武の事也、此時文昭公は三歳清武は二歳とあり、此難産の子は與右衛門が子ならんか、追て考ふべし、然るに又お保良の方の姉ありし故、彼の御産の子養育の爲と稱して、與右衛門方へ遣され、妹のお保良跡の後妻となり、此腹に女子二人出生せり、一女は笹山甚太郎具晴に嫁し、一女は千本兵左衛門に嫁せり、夫の越智與右衛門死去の後、榮月尼と稱せしは此事也、お保良妹あり、小埜太兵衛に嫁し、同靱負を生じ、女は黒田甲斐守長重に嫁せり、其後右の源右衛門は、越智與右衛門清隆の異見に依て、弟清右衛門良中を武士に取立られ、甲府家へ御抱守を勤仕して、其後五百石を拜領す、清右衛門子、同主水と稱するなり、

二十七日、織田信雄、尾張熱田宮大工岡部又右衛門二、中島郡ノ地ヲ給

赤池郷

矢部甚兵衛  
菅沼兵庫  
井村彦兵衛

織田長益

ス、

〔張州雜誌抄〕

二十六士藏古文書三 愛知郡熱田地士

一 赤池之郷

右爲御扶助被仰付候、尙以被遂御糺明、高頭重而被書載、御判可被遣之旨候、可被得其意候、恐々謹言、

天正十一年八月廿七日

矢部甚兵衛(花押)

菅沼兵庫(花押)

井村彦兵衛

御大工又右衛門殿

爲御扶助、於熱田之内參百貫文、兩人に被仰付候、尙追而御判可被遣之旨御  
錠候、可被得其意候、已上

天正十一年九月十七日

矢部甚兵衛(花押)

長益(花押)

貳百貫文 又右衛門殿

天正十一年八月二十七日

九六七



天正十一年八月二十七日

百貫文 又七郎殿

○信雄、堀田正道及ビ祖父江五郎衛門ニ、中島郡ノ地ヲ給スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔寛政重修諸家譜〕

六百四十四

堀田正道

彌三郎、加賀守

母は大橋和泉守貞安が女、

織田備後守信秀をよび右府の旗下に屬し、右府事あるのち豊臣太閤につかへ、天正十一年八月五日、尾張國中島郡のうちにして采地を加へられ、二千四百六十石餘の朱印を與へらる、○下略、ナホコノ書ノ文體ハ、秀吉ヨリ加増セラレタルガ如クナレドモ、

〔氷室和子氏所藏文書〕

〇尾張

一西嶋 一清水 一あま池

右三郷被仰付候、彌被遂御糺明、重而御判可被下旨御錠候、已上、

天正十一年八月晦日

矢部甚兵衛(花押)

曾我兵庫頭(花押)

祖父江五郎衛門殿

池田恆興、美濃眞長寺二寺領ヲ寄進ス、

堀田正道

曾我尙祐

祖父江五郎衛門

九六八

〔眞長寺文書〕

〇美濃

當寺領之内を以、田七段、畠六段、令寄進候、全永可有寺納者也、恐々謹言、

天正十壹

恆興(花押)

八月廿七日

山縣之内 眞長寺

(懸紙) 眞長寺

勝入

甲斐下山邑主穴山勝千世、舊ニ依リ、龍雲寺門前ノ諸役ヲ免除ス、

〔龍雲寺文書〕

〇甲斐

貴寺門前 壹間、押立借馬、同普請諸役等、如前々不可有之者也、仍如件、

天正十一 癸未

朱印

勝千世

龍雲寺

納所

大日本史料 第十一編之四終

天正十一年八月二十七日

九六九







## X.

AVVISI DEL GLAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII., LXXXIII.  
ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

Pp. 120-122.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the  
Society of Jusus. Nagasaki, January 2, 1584.

AVVISI DELL' OTTANTATRE.

[Extract]

Et Faxiba hormai piu libero & sciolto cominciò a ordinare le cose dello stato della maniera sequente.

Prima d'ogn'altra cosa leuato di Anzuci il nipote di Nobunanga, alquale direttamente si apparteneua l'imperio, lo fece mettere nella Fortezza di Sacamoto, con vn gentil'huomo che hauesse cura di lui senza alcuna pompa, ò grandezza. Al Rè d'Igè, Zio (come si è detto) e tutor del fanciullo aggiùse due Regni, cioè quello di Voari, & quello de Igà, facendogli intendere, che se ne andasse in buon'hora, & contento di quelli tre stati, si guardasse di entrar nella Tenza; & occorrendogli cosa alcuna, scriuesse, che si prouederebbe. Ad Icheda Chinocamidono collattaneo di Nobunanga Signore quasi di tutto il Regno di Ceunocuni, diede il Regno del Mino, con tal conditione, che lasciasse tutto quello che possedeua con alcune Fortezze di molta importanza. Ilche fece ben contra sua voglia. A Niuno Gorozaimon uno de' più ricchi, & fauoriti di Nobunanga, leuò il Regno di Vacasà, & gli diede quello di Gecigen. A Tachecaua (alquale già hauea tolto le fortezze principali, come disopra si è detto) mādò a dire, che in segno di soggettione si radesse, & lasciata anche la Fortezza di Nagaxima, doue resideua all'hora, uenisse a seruirlo in Corte con suo figliuolo: & che al detto figliuolo darebbe nel Regno di Farima la entrata di dieci mila moggia di riso: & a lui quattromila & se non vbidiua cōmandarebbe a contadini di Nagaxima, che gli tagliassero il capo, & lo portassero in Corte. Hora (quali sono le humane vicende) Tachecaua, essendo prima tale, che Faxiba con honor suo hauerebbe potuto seruirlo, astretto da cruda necessitā,

accettò il partito, rese la Fortezza, rase il capo & la barba, & con mille cinquecento persone di casa sua vñe humilmente a dare vbidienza a Faxiba.

Il Regno di Cauaci essendo gia diuiso in due parti da Nobunanga, & la metà data à Xegan Iamaxiradono, & l'altra metà a'tre capitani del Vacai, Faxiba mandò a dire a Xegan, che sen'andasse nel Regno di Mino à star con il Collattaneo di Nobunanga, & che à suo tempo lo chiamerebbe. Et parimente esclusi i Capitani, & altri personaggi, prese il possesso di tutto il regno di Cauaci, e il medesimo fece del Regno di Ceunocuni, cacciandone i Signori naturali, da vn figliuolo di Xeifeò, & da Giusto in poi, lasciandogli la sua fortezza di Tacacuchi, con la sua entrata di prima, & col Seminario, e'Nostri che n'hāno cura, tutti (come dicemmo) sotto l'ombra di Giusto, il quale hoggi di è vno de' più fauoriti, & cari di Faxiba. A' Fachiadono hà tolto il Regno di Izumi che Nobunanga gli diede, & in ricompensa gli hà assegnato l'entrate di Soruga nel Regno di Gecigen. Ad vn'altre Caualiere chiamato Maieda Matazaiemon, hà dato il Regno di Noto intero, & la metà del Regno di Saga. A Curanoxuche hà dato quello di Itcù. A suo fratello Coicirodono, tre, cioè quel di Naba di Tamba, & di Tagima. Il Rè di Gecigò dalla parte del Bandò ha mandato a Faxiba ostaggi, & hà fatto seco amicitia. L'istesso hà fatto anco il Rè di Micaua cognato di Nobunanga.



cinco dias depois de ser tornado o junco de Antonio Garces pera a China de Quetunocçu lhe poserão fogo a terceira vez na sua fortaleza de Arima, aonde se lhe queimou quanto tinha, ficando tam necessitado como de tal soccesso se podia esperar, mas tornou logó com o fauor diuino a restaurarse nas casas, fazendoas no cume da serra, q̄ estaua em riba das casas, que tinha quando vossa Reuerencia cá estaua: seu tio Safeoyedono he bom Christão, & trabalha polo ajudar como pode, mas tudo por ali esta fraco por não terem renda, nē parte de que se possão ajudar. Os irmãos do Tõno alternatim vao residir como refens em Yacçuxiro, aonde esta hum irmão del rei de Sâçuma.

## VIII.

AVVISI DEL GIAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII., LXXXIII.  
ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

Pp. 118-119.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the  
Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584.

AVVISI DELL' OTTANTATRE.

[*Extract*]

Fatto questo, i Regni di Iechigē, di Saxa, di Noto, & di Iechū, si resero tutti humilmente a Faxiba: il quale vedendo estinto il maggior, & più potēte inimico che hauesse, & trouandosi hormai sēza contradittione Signor della Tenza, & di tanti Regni (come gli huomini per l'ordinario meno reggono alle cose prospere, che alle auerse) ha cominciato a gonfiarsi, & insuperbire di maniera, ch'egli è commune opinione, che in questo habbia da auanzare Nobunanga. Il Capitano Generale & nipote di Xibata fra tãto ascōdendosi nel Regno di Gecigen in casa di alcuni suoi cōtadini, fù tradito da vn di loro per la speranza del premio. Fù preso anco vn figliuolo di Xibata di età di sedici anni, giouinetto di rare parti, alquale Nobunāga hauea destinato per moglie vnā sua figliuola. Furono amendue condotti al Meacò, & leuati per le principali strade sopra vnā certa

carretta (che qui è le maggior infamia che possa essere, & vale altrettanto, come appresso noi strascinare a coda di cauallo) in vn luogo deputato fuori della Citta, doue per commandamento di Faxiba, fù tagliata all'vno, e all'altro la testa.

## IX.

AVVISI DEL GIAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII., LXXXIII.  
ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

Pp. 122-123.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the  
Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584.

AVVISI DELL' OTTANTATRE.

[*Extract*]

Il Rè di Amanguci sino al principio di quest'anno del 83. hauea mandato à Faxiba vn'Ambasciadore sopra le controuersie ch'erano tra loro, & Faxiba l'hà rattenuto sempre à posta appresso di se, acciò raccontasse poi al suo Rè i successi veduti; & con questo gli diede vnā lettera, facendola prima leggere in voce alta innanzi a molti Cauallieri, & era del tenor che siegue; L'anno passato nō trouandomi io anchora molto in arnese, vi mandai a dire, che de i noue Regni che vi restauano, me nel lasciaste cinque, per hauerlo cosi promesso a Nobunanga. Voi faceste vista di non intendere, parendoui che le cose mie non passarebbono molto bene. Hora come elle siano andate, me ne rimetto a quel che vi dirà il vostro Ambasciadore. Io non la stò con molto appetito de' vostri regni, ma desidero che mātenghiate vostra parola: Et se in cio mi daretē sodisfattione, restaremo in pace: quando nò, la vedremo con le armi in mano: & il trionfo sarà per chi haurà miglior ventura: Et quando voi vi risoluiate a questo, io haurò cura di venirui a trouare. Da questa lettera, & dalla relatione dell' Ambasciadore, & di altri, spauentato il Rè di Amanguci, ha hauuto per bene di accettare il partito, dandogli i Regni, & ostaggi; Et cosi è restato d'accordo.



réjouit *Xibatadono*; mais au-lieu de leur dire ce qu'il prétendoit faire, il les convia à un festin, où il eut soin que rien ne manquât de tout ce qui peut contenter le goût & les oreilles. Lorsqu'on s'y attendoit le moins, & qu'on ne songeoit qu'à se rejouir, il fit apporter quantité de bois dans la Sale du festin, & y mit le feu en même temps, puis à grand coups de sabres on tua femmes, filles, enfans, & tout ce qui se rencontra. Quand il n'y eut plus que les conviez, qui avoient eu soin de jeter les corps dans le feu à mesure qu'ils les massacroient, ils se tuèrent eux-mêmes proche du feu qui les consuma. *Toquixiro* voyant la flame & la fumée, crut que le Ciel lui vouloit aider à se rendre maître du Fort, c'est pourquoi il approche, & fait escalader les murailles, où il ne trouve nulle résistance. Lors qu'ils y fut entré, & qu'il vit la desolation que le desespoir avoit faite, il eut quelque remords, de l'avoir causée, mais son ambition, & la joie de voir que tout lui succédoit, l'étouffèrent bien-tot après.

## VI.

AVVISI DEL GIAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII., LXXXIII.  
ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

P. 119.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the  
Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584.

AVVISI DELL' OTTANTATRE.

[Extract]

Sanxeci hauendo gia innanzi hauuti alcuni tocchi, & influssi del Cielo, per conoscere i beni della eterna vita, accecato poi dal desiderio di regnare, & scordatosi delle prediche vdite, ritornò a mettersi nelle mani de' Bonzi, & gettado sorti, & facendo promesse, & voti a suoi idoli, mentre se ne vâ a domandar il soccorso, & la protettione di Tachecaua, vcciso per viaggio in gratia di Faxiba da quella poca gente che seco hauea, fini miseramente i suoi giorni.

## VII.

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO  
OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Carta do P. Luis Froes pera o padre Alexandre Valegnano,  
Prouincial da India, de Nagaçâqui, aos vinte de  
Janeiro, de 1584 annos.

[Extract]

Quanto a estas partes do Ximo, depois que dom Protasio sôr de Arima se aleuantou contra o tyranno Riuzôji, que o tem perseguido, algũas cousas socederão, mas atêgora denhã de grande monento, porque el rei de Sâçuma aquem Arimandono tomou por valedor, & emparo de suas necessidades tẽ prolongadas suas ajudas atêgora, com auer hum anno & meo, que ae vão tudo em esperanças, que logo fará passar o exercito a estoutra bãda do Tacâqu pera lhe fazer reduzir as fortalezas, que contra Arimãdono estão rebelladas, mas os de Sâçuma se ocupão em conquistarẽ o reino de Fingo, & ali applicão sua gente, & ali poem suas forças, & quando muito mandão algũs capitães, que venhão vigiar o Tacâqu, a gente dos quaes ordinariamente se ocupa em andar furtando por aquelle mar sem perdoar aos amigos, ou inimigos. A fortaleza de Andòqu se tem lançada da parte de Sâçuma, mas como he cousa tam pequena, não tem Arimandono dali muita ajuda pera poder entrar Ximabarã que he a chauce de seus inimigos.

Quis Arimandono este anno passado ver se podia congraçarse com Fucaforidono pera meter cá hum pé nas terras de seus vassalos, & mandoulhe tratar dos negocios a hum seu priuado, por nome Safi-oyedono, ainda mancebo com outros quatro ou cinco, o Fucafôri, q̄ he hum jugurtha nas insidias os cõuidou, & recebeo com grandes gasalhados, & complimentos, & depois ter tratado com elles o q̄ pretendião os conuidou esplendidamente, & em se tornando a embarcar satisfeitos, & contentes da reposta q̄ lhe deu, tinha aparelha das outras embarcações, aõde logo a todos mataraõ, sem ficar nenhũ.

Aconteceo outra desgraça a dom Protasio, que foi quatro ou



moglie sorella di Nobunāga (la quale hauea sposato pochi mesi prima) a colpi di pugnate la uccise, & con lei di mano in mano tutte le altre sue donne, figliuoli, & figliuole, & immediatamente di poi con lo stesso pugnale tagliatosi il ventre in croce, il misero & infelice cade. Il medesimo fecero tutti gl'altri, uccidendo prima le sue care consorti, figliuoli, & figliuole. Onde si leuarono subitamēte in luogo de'canti passati, voci, gridi, & pianti tanto alti, & horribili, che vinceuano lo strepito delle fiamme. Ci furono anco di quelli che in iscambio di tagliarsi la pancia, accoppiati d'accordo, con scambieuoli ferite si uccisero: Et acciò che non rimanesse pur vn vestigio di tal disperatione, & fiera, sopraggiungendo immantinente il fuoco, diuoraua con tutto il resto quei sanguinosi & horrendi cadaueri.

Vna vecchia sola honorata, & spedita nel fauellare fù lasciata uiua a posta, accioche uscita poi dalla Fortezza, come fece, narrasse diffusamēte a gl' inimici il successo da lei veduto. Et di questo modo fini il più valoroso Capitano che fosse nel Giappone in tempo di Nobunanga.

## IV.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

PARIS, M.DC.LXXXIX. TOM. I. LIVRE VIII.

PP. 492-493.

Il y avoit parmi les Confederez le beau-frere de Nobunanga qui avoit nom Xibatadono. Faxiba jugeant que c'estoit un coup d'estat de se defaire de luy, l'assiege avec quarante mille hommes dans une forteresse où il s'estoit jetté luy & quantité de ses gens avec leurs femmes & leurs enfans. Celuy-cy voyant qu'il ne pouvoit échaper, forme une resolution étrange pour ne pas tomber entre les mains de son ennemi. Il assemble tous ses gens & leur dit qu'il estoit resolu de s'ouvrir le ventre; que pour eux il les prioit de brûler son corps & de faire leur paix avec Faxiba pour sauver leur vie. Tous luy répondirent qu'ils ne vouloient point survivre à leur Seigneur & qu'ils suivroient son exemple. Xibatadono les remercie de leur affec-

tion & les invite à un grand festin qu'il avoit fait preparer. Après le repas il fait remplir les salles & les chambres de bûches & de fagots, & y ayant fait mettre le feu, il court l'épée à la main sur sa femme & la tue, puis sur toutes ses filles & leurs filles d'honneur qu'il égorge. Les autres firent le même chacun de leur costé, & après cet horrible carnage, ils se fendirent tous le ventre en attendant que le feu les consumast. Il y en eut quelques-uns, qui manquant de courage se sauverent au travers des flâmes & raconterent ce qui s'estoit passé.

## V.

A. MONTANUS, AMBASSADES MÉMORABLES DE LA  
COMPAGNIE DES INDES ORIENTALES DES  
PROVINCES UNIES, VERS LES EMPEREURS  
DU JAPON. AMSTERDAM, M.DC.LXXX.

PP. 137-138.

*Toquixiro* mit son pupille qui n'avoit encore que trois ans dans un fort beau Château, où il eut soin de l'élever selon l'éclat de sa naissance. Si-tôt qu'il se vit Maître du seul heritier de l'Empire, il forma des desseins, ausquels personne n'avoit droit de s'opposer, que le Beaufrere du Feu Empereur appellé *Xibatadono*. Pour s'en deffaire avant qu'il lui pût échapper, il le surprend dans une Forteresse où il croyoit être à couvert des insultes de la fortune, & des outrages de ses ennemis. *Xibatadono* se voyant hors d'état d'échapper, assemble ses amis qui l'avoient suivi dans sa retraite, & après les avoir remerciés du zèle qu'ils lui témoignent, il leur dit sa resolution, qui étoit de se tuer, plutôt que d'attendre la mort de la main de *Toquixiro*. Ensuite les ayant priez de brûler son corps si-tôt qu'il seroit expiré, de peur, dit-il, que le *Tyran* ne l'insultât, il leur conseilla de faire leur paix avec lui, pour sauver leurs vies & leurs biens. A ces paroles ses fidelles amis attendris, répondirent tout d'une voix qu'ils vouloient vivre & mourir avec lui; qu'ils l'avoient suivi à cette intention, & qu'enfin s'il mouroit, ils ne vouloient point lui survivre. Cette resolution



antre algũs criados seus lauradores, hum delles polo interesse do q̃ lhe poderião dar o entregou: foi tomado tambem hum filho legitimo de Xibáta, que não tinha outro, moço de grandes partes, de idade de dezaseis annos, o qual Nobunãga queria casar com hũa filha sua. Tomados ambos de dous o filho, & o sobrinho os trouxerão ao Miáco, & ali foi cada hum delles posto em sua carreta, em que passarão pollas ruas principaes da cidade, que he a mesma infamia, & abatimento, que entre nós arrestar por justiça ao rabo de hum caualo, & em hum determinado lugar, que pera isso ha fora do Miáco lhe mandou Fãxiba a ambos cortar as cabeças.

Sanxichindono aquem Deos nosso Senhor primeiro tocou com algũs influxus de sua graça pera conhecer os bẽs eternos da vida futura, & esquecido das pregações q̃ ja tinha ouuidas, & cego no sequioso desejo, que tinha de reinar, e ser senhor da Tẽca, dizia que era impossivel auerse hum homẽ de fazer Christão, & guardar a lei de Deos ao pẽ da letra, & ser senhor de Iapão, pelo que tornando a ver se podia por industria de seus falsos idolos, e mentirosos Bonzos, e enganosos feiticeiros alcançar seu intento vendo que ja não podia ajudarse de Xicãta, que era morto, lançãdo sortes, & vsando de feitiçarias, & fazendo muitos votos, & prometimentos a seus idolos determinou com a pouca gente que consigo tinha em sua fortaleza sairse della, e do reino de Minno, que ja possuia, & irse meter debaixo da proteiçãõ de Taquecauã inimigo de Faxiba. Os que o acompanhauão hiãõ forçados polo pouco remedio que lhe sentiãõ tẽr, & no caminho consultãdo hũs com os outros acharãõ que o bom era poremno na outra vida & elles tornaremse a Fãxiba a pedirlhes renda, & assi o fizeram, & desta maneira no caminho acabou miseravelmente sua jornada.

## III.

AVVISI DEL GIAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII., LXXXIII.  
ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

PP. 116-118.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the  
Society of Jesus. Nagasaki, January 2; 1584.

AVVISI DELL' OTTANTATRE.

[Extract]

\* \* il quale essendo già di sessant'anni, ma molto valente Capitano, e tutta la sua vita essercitato nell'armi, vscendo in vna Sala grande, fece vn breue ragionamento a i gentil'huomini che hauea seco, dicendo cosi: L'essermi ritirato in questa Rocca è stato come sapete piu presto caso di guerra, che viltà mia, & hora hauendomi ad esser tagliato il capo da gl'inimici, & oltreggiate le vostre mogli, & la mia, con i figliuoli, & parenti, con perpetua infamia del nome & casa di Xibata: io stò determinato conforme al costume della nobiltà Giaponese, prima che ciò auuenga, tagliarmi il ventre, & che il mio corpo si abbruci, senza essere veduto, ne ritrouato dall'inimico: Voi altri, se vi resta alcuna speranza di perdono, haurò caro che saluiate le vostre persone. Risposero tutti che non solamente essi, ma le mogli, & figliuoli, senza restarne pur vno, lo seguirebbero all'altra vita. Soggiunse all'hora Xibata: molto stimo la prontezza de gl'animi vostri, & la conformità delle vostre volontà con la mia: Solo mi duole di nõ hauer cõ che rimeritare tanta Fede, & amore che io veggo in tutti. Et con queste fece venir molte viuãde, & istromenti di musica, e tutti si posero a mãgiare, & bere, sonare, & cantare, con gran risate, & allegrezze, come se fossero in qualche trionfo, ò danza reale. Staua gia molta paglia secca posta per tutte le stanze, tenendo ben chiuse le porte, & le finestre della rocca, senza tirar pur vna archibugiata, ò frecciata a gl'inimici, i quali stupiuano di tanta quiete d'armi, & di tante musiche, & feste. Sù questo si pose poluere, & fuoco alla paglia, & cominciarono ad ardere le case; Et Xibata il primo di tutti auuentandosi furiosamente contro la



fogo, & cõ bom vëto ardeo quasi toda. O de mais exercito do reino de Yechigèn, q̄ escapon cõ a vida, mas sê armas se diuidio polas serras, & os soldados se escõderão por aquelles môtes, e Sácuma com elles.

Fâxiba proseguio a victoria entrãdo cõ todo seu exercito pelo reino de Yechigê aos 3. dias de Junho, & chegou a cercar a fortaleza de Quitanoxo, onde Xibâta estaua cõ pouca gête recolhido, o qual sêdo ja homê de 60. annos, mas mui valeroso capitão, & toda sua vida exercitado na arte militar, saindo a hũa sala grãde, fez hũa pratica breue aos fidalgos, q̄ com elle estauão emq̄. lhe disse. Fugir eu atê me recolher aqui, mais foi ventura da guerra, q̄ couardia minha, pelo q̄ auendo de ser minha cabeça cortada polos inimiaos, & vossas mulheres, & a minha, os filhos, & os parêtes desonrados, fica sêdo perpetua infamia do nome, & casa de Xibâta, q̄ eu sêpre tiue, polo qual conforme ao costume ordinario q̄ sabeis auer na fidalguia de Iapão, eu cortarei logo a darriga, & se queimarâ meu corpo pera q̄ dos inimigos não seja visto, nê achado, & se vos parece q̄ podereis ter recurso cõ lhe pedir desperdão folgarei, q̄ salueis vossas vidas. Responderão todos, q̄ não somête elles, mas suas mulheres, & filhos, sem ficar hũ sô o seguirião atê outra vida, e não aueria-falta em o imitar respondeo Xibâta, muito estímo a promptidão de vossos animos, & a conformidade de vossas vontades com a minha mas o de q̄ somête me peza, he de ja se me não offerecer lugar nesta vida com q̄ vos possa gratificar por obras o amor q̄ vejo todos me têdes. Cõ isto mãdou trazer muitas iguarias, cõ q̄ os conuidou, e cõ seus instrumentos de musica, bebêdo de quando, em quãdo se poserão a tâger, & cãtar, com grãdes rizadas, & alegria, como se estiuerão triũfando na victoria, ou em festas de serão real. Estaua ja muita palha posta polas camaras, & salas, e todas as portas, & janelas da fortaleza bẽ fechadas sê de dêtro tirar aos inimigos, que tinhão cercada a fortaleza nenhũa maneira de espingardada, cousa q̄ os punha de fora em admiração, verem dentro tanta quietação nas armas, & tantas vozes de canticos de alegria. Nisto em se pondo poluora à palha, & começando a arder as casas, Xibâta foi o primeiro

q̄ aremeteo a sua molher irmã de Nobunãga com que poucos meses suia era casado, & a matou, & a todas as mais molheres de sua familia, e logo immediatamente cõ hũa adaga cortou a barriga em cruz, e cahio ali morto: o mesmo fizerão todos os outros fidalgos, & a mais gente que com elle estaua na fortaleza matando primeiro suas queridas molheres, filhos, & filhas, aleuãtarãose logo em lugar dos canticos precedentes, tão grãdes gritos, alaridos, & choros, cõ vozes tão altas, & espantosas, que excedião ao rumor, & horrendo estrôdo, q̄ o fogo laurãdo fazia, & assi sem nenhũ perdoar a tenrra idade, & piadosas lagrimas de seus pequeninos filhos, os mataraõ a todos, & elles depois ou a si mesmos, ou hũs a outros se acabarão de matar, & pera delles não ficar rasto veo logo fogo que acabou de consumir os miseraueis corpos que ali ficauão. E pera que Fâxiba, & os mais inimigos tiuessê inteira noticia de tudo o que se dêtro tinha passado, tomou Xibâta cõ parecer de todos, antes de morrerem hũa velha hõrada expedita no falar, que a tudo isto se achou presente, e derãolhe lugar pera q̄ se saisse por hũa porta trauesa da fortaleza, e contasse por extenso aos inimigos o socesso doque tinha visto, como fez, & assi acabou ali, & se fez em cinza o mais esforçado capitão, & valeroso homê que auia em Iapão no tempo de Nobunãga. Logo todo o reino de Yechigèn & o reino de Cãnga, & o de Noto, & Yethcú, se entregarão todos por vassalos de Fâxiba, e como elle não tinha outro inimigo mais poderoso de quem se temer que este, vendoo morto, & elle senhor da Tencá, & de tantos reinos, foise tanto empolando, & enchendo de soberba, & arrogancia, que parece segundo dizem, & as cousas que faz exceder na jactancia, & opinião de si ao mesmo Nobunãga, & assi mostra maior estado, & ser mais estimado por seu esforço na guerra, & ao que mostra pretende não descansar atê se não fazer absolute senhor de todo Iapão, como Nobunãga intentaua. He mui resolute, & facil em cometer arduas, & difficultosas cousas de guerra, & depois q̄ começou a reinar, quasi sempre ategora teue no campo vinte & trinta & quarenta mil soldados.

O capitão mor do exercito do Xibâta, & sobrinho seu que era Sácuma, de quem acima falamos escondendose no reino de Yechigèn



valeroso capitão, & intrepido na guerra, constringido de sua persuasão, sairão ambos sôs cõtra todo o exercito de Yechigèn, e durou a batalha grande espaço alãceandose brauissimamente, mas como os inimigos eraõ tantos, & sahião a cada hora de refresco, cansados os dous capitães forão desbaretados, & se recolherão. Xeifão se foi pera a sua fortaleza q̄ era mui fraca, & Iusto com dous ou tres homẽs que o seguirão ao principio, ainda que depois se lhe ajuntou mais gente, com muita difficuldade, & por abra mais milagrosa que forças humanas escapou, & se meteo na fortaleza do irmão de Fâxiba, que ali estaua perto. Foi logo o exercito de Xibâta pòr cerco a fortaleza de Xeifão, & sem muito trabalho a entrou, & o matarão a elle com muita gente sua fugindo algũs que escaparão, & desta maneira aquelle dia ficou o campo, & vitoria polos de Yechigèn, & morrerão naquelle encontro dous cunhados de Iusto, & seu sogro, & muitos fidalgos nobres de Tacacçúqui, mas o que logo soou assi polo Goquináy, como por Búngo, & polo Ximo foi ser morto Iusto com todo seu exercito. o que causou grande dor & tristeza em toda a Christandade de Iapão, por ser coluna da Christandade, & emparo da Companhia naquellas partes, tam illustre na virtude, & magnanimo na guerra, & ainda que pola maior parte as roins nouas são verdadeiras, quis nosso Senhor aliuiar a vniuersal tristeza de toda a Christandade de Iapão cõ lhe dar a elle vida.

Chegadas estas nouas a Fâxiba, que ainda estaua em Minno fazendose prestes pera dar batalha a Saxichindono, nenhũa mudança se lhe enxergou no rosto, antes como sempre foi mui valeroso na guerra logo em continente deixando ali dez mil homẽs, se veo com o demais exercito embusca do inimigo pera lhe dar batalha, caminhando segundo dizem, dous dias, & duas noites, & chegando á vista delle se meteo na fortaleza de seu irmão, aonde tambem estaua Iusto Vcundono, com quem Fâxiba teue muitos cumprimentos, agradeçdolhe co palauras, & mostras de amor o grande risco, a que auenturara sua pessoa, & gente que lhe morrera somente por seu seruico.

Aos vinte & hum da sua primeira Lũa, ao primeiro dia de

Ianeiro os de Yechigèn, que ainda estauão no campo donde alcançarão a vitoria, em amanhecẽdo se forão retirando pera o mõte onde primeiro tiuerão sua estança, & vèdoos Fâxiba da fortaleza onde estaua, mãdou a grão pressa, q̄ lhe saissem seis mil soldados. Sácuma sobrinho de Xibâta, seu capitão geral como os vio tornou atras cõ grande, e intrepido animo a darlhes batalha, aqual foi cruel, porq̄ de hũa e outra parte estiuerão pelejãdo desde amanhecer até o meo dia, matãdose as lancadas hũs aos outros cõ tão esforço q̄ até aquellas horas esteue a vitoria de hũa e outra parte sem se determinar. Finalmẽte sahio depois todo o exercito das fortalezas de Fâxiba, & ajuntandose mais de vinte mil homẽs em hũ corpo derão cõ tão grãnde impeto sobre os inimigos ja cãados, q̄ os desbaratarão & fugindo se meterão por hũa serra espessa de aruoredos, dõde apenas se vião os homẽs mais q̄ algũas põtas das bandeiras. Os de Fâxiba como lhe hião no alcãce, e os seguirão rijamẽte, faziõlhe deixar polo caminho as armas, & espadas, & até os vestidos lhe eraõ pesados & os largauão pera cõ melhor ligeireza poderẽ saluar as vidas, de tal maneira q̄ de repẽte aparecerão emriba do mõte mais de mil e quinhentos homẽs meos nus.

Xibâta ao tẽpo q̄ se deu esta batalha não sahio ao cãpo, porq̄ ficauão mais de mil homẽs, fazẽdo vigia ao redor da fortaleza de Quuitarondono, pera q̄ os de dẽtro não saissem em ajuda de Fâxiba, cujos vassalos erão. Aduertindo Fâxiba q̄ ainda lhe ficaua o principal inimigo por desbaratar, mandou ao seu exercito, q̄ hia saguindo o alcance dos fogidos polo monte ariba, voltasse depressa, & desse todos sobre Xibâta, como fizeraõ. Xibâta com muito trabalho, & difficuldade se lhe hia acolhendo fugido, & os q̄ o segião lhe matauão muita gente, mas cõ se meteo pellos caminhos de Yechigèn q̄ são mui estreitos ainda que o hião seguindo, pode escapar até chegar cõ mui pouca gente à cidade de quitanoxo, a principal de Yechigèn, & em se recolhẽdo em sua fortaleza, cujos telhados erão feitos todos de telhas de pedra taõ liza, e bẽ talhada como se forã feitas ao torno, e antes de entrar na fortaleza, peraq̄ os inimigos q̄ o seguirão se não aproueitassem dos mantimẽtos, e riquezas da cidade lhe mandou pòr



& agravos contra Xibata seu pai adoptiuo lhe armou treição, & se lançou da parte de Fâxiba, cujo exercito naquella sezão estaua perto daquella fortaleza. Tomando Faxiba logo posse della se partio caminho de Nagaxima contra Taquecaua, abrazando, & queimãdo os lugares por onde passauão. A primeira fortaleza que cometerão foi hũa por nome Cameyama porem os de dentro, que estauão mui bẽ apercebidos as espingardadas, e lançadas lhe matarão muita gẽte. Esteue com tudo Faxiba sobre aquella fortaleza muitos dias com mais de quarente mil homẽs, & sãdo cousa noua em Iapão lhe minarão a fortaleza, & o orimeiro que fez a mina, & entrou por ella, & chegou a por fogo dentro debaixo de hum baluarte foi Iusto & chegado ali cahio o baluarte, & por pouco que o não matou acolhendo de baixo oito Christãos, mas a sombra dos emparos que leuauão pera a mina se saluarão todos, & sairão viuos, que não pos pouca admiracão aos do exercito. Os da fortaleza como se virão tam apertados, pedirão as vidas, & sairão se da fortaleza, & os de Faxiba tomarão posse della. O capitão que ali estaua, porque tinha sua molher, & filhos em Nagaxima se foi pera Taquecaua seu senhor, darlhe as rezões porque auia entregado a fortaleza, ja que não tinha remedio pera se defender, nem delle podia ser socorrido, porem não lhe valdo nada porque logo o Taquecaua lhe fez cortar a cabeça.

Antes que esta fortaleza se rendesse mandou logo Taquecaua recado a Xibáta, que não perdesse aquella occasião, que aquelle era muito bom tempo pera ir com seu exercito senhorear a Tenca, pois Fâxiba estaua ocupado com elle em lhe combater suas fortalezas. Xibáta despachou logo hum seu sobrinho, por nome Sácuma, mui esforçado capitão com algũs sete ou oito mil homẽs, pera que viesse diãte, & elle com o restante da gente vir atras. Sacuma se veo logo por com seu exercito tres ou quatro legoas de Nagafama, aonde estaua o perfilhado de Xibáta, mas quando ali chegou ja a fortaleza de Cameyama estaua entregue, pelo que Fâxiba mãdou obra de vinte mil homẽs ao encõtro de Sacuma, pera q̃ não passasse a diante, & quinze mil homẽs deixou sobre outra fortaleza de importencia do mesmo Taquecauá, chamada Miné. Os que forão ao encontro de

Sácuma, fizerão nos caminhos cinco seis fortalezas pera os que vinhão de Yechigèn, não passarem auante, os quaes assentarão seu arraial sobre hum monte á vista da gente de Fâxiba, mas por ser o lugar forte não podião ser cercados.

A Fortaleza de Miné sobredita, alem de ser grande, & forte tinha dentro muita gente, & mantimentos, & o capitão esforçado, por onde se passarão muitos dias antes de a render: emfim os de Faxiba a minarão tanto, & a poserão em tal aperto que os de dentro tratarão de concertos pedindo as vidas, as quaes Fâxiba lhes concedeo, com tanto que lhe entregassem morto a seu capitão, & assi o fizerão, & se lhe rendeo aquella fortaleza.

Sanxichidono com cobiça de parecerlhe, que ajuntandose com Xibáta, & Taquecauá, poderia vir, como pretendia a ser senhor da Tẽca esquecido do amor de sua mãy & filha, & de seus vasallos, que tinha dados em refens intentou fazerse outra vez inimigo de Fâxiba, & por tal se declarou, mas poucos do reino de Minno se ajuntarão cõ elle. Sabido isto por Fâxiba ordenou seu exercito sem nenhũa detẽça, & se foi meter no reino de Minno na fortaleza de Vogaque, que ja com elle se tinha lancada, pera dali ir marchando pera a cidade do Guyfu, & acabar de destruir a Sanxichidono, & mandou por nas Fortalezas fronteiras de Yechigèn quatro capitães com boa copia de soldados escolhidos, os capitães forão Coichiro, seu irmão, Iga o filho adoptiuo de Xibáta, & nas mais fronteiras aos inimigos ordenou que estiuesses Xeifão & Iusto. Aos dezanoue dias de Maio a gente de Yechigèn se foi saindo de sua estancia, & se vierão chegando pera onde estauão Xefioye, & Iusto, os quaes tinham consigo mais de dous mil homẽs, & neste tẽpo ja auia algũs dias, que Xibáta era ali chegado de Yechigèn com o restante do exercito, & ajuntouse com seu sobrinho Sácuma, cujo numero de gente poderia ser de quinze, até dezaseis mil homẽs, Xeifão, & Iusto fizerão seu conselho, & ainda que a Iusto logo desdo principio lhe pareceo temeridade grande sair ao encontro dos inimigos com dous mil homẽs, todauia Xeifão perfiou com instancia, dizendo, que em todo caso auia de dar batalha. Iusto como lhe não era inferior, antes muito mais



sparsero disarmati per quelle montagne. Ma Faxiba seguindo la vittoria, entrò con tutto lo essercito del Regno di Gecigen, & pose l'assedio alla Rocca doue staua Xibata, \* \* \* \* \*

## II.

### SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO OS PADRES, & IRMÃOS DA COMPANHIA DE IESUS.

Carta do padre Luis Froes pera o padre Alexandre Valegnano, prouincial da India, de Nangaçáqui, aos vinte de Ianeiro, de 1584 annos.

[Extract]

Pella carta annual, & por outras particulares, que de cá vão este anno de oitenta & tres, saberá vossa Reuerencia as nouas da Cõpanhia, & do que acerca da Christandade se tem passado, depois q̄ escreuemos largo polo padre Francisco Cabral, quando se foi pera a China. Esta particularmente seruirá de vossa Reuerencia entender o que se tem passado nas partes do Miáco, & câ nestas do Ximo, e em Búngo acerca das guerras, de cujo bom ou mau soccesso sempre participamos, porque pola maior parte nellas se achão infalliuelmente algũs dos Christãos principaes que nestas partes temos, & porque os nomes dos senhores, & dos lugares de Iapão são lá peregrinos, assi na India, como em Europa, o que faltar pera se melhor fazer conceito desta narraçãõ vossa reuerencia o podorã lâ suprir, polo que presencialmente tem visto em todas as partes desta prouincia que visitou.

Depois da morte de Nobunãnga o mais poderoso senhor, que ficou nas partes do Miáco, & o que nellas triunfa, & tem maior parte de reinos, he Faxiba Chicugendono, que estaua em nome de Nobunãnga no reino de Fárima conquistando os reinos do Móri, o qual pera melhor assentar suas cousas tomou o neto de Nobunãnga, filho do principe, que com o pai matarãõ minino de tres annos, & pôlo em Anzuchiyama com titolo de Monarcha de Iapão, dandolhe por seu Aio o segundo filho de Nobunãnga, chamado

Ochaxem Fongedono, rei de Ixé, mas tudo isto superficialmente, porque Fáxiba gouerna tudo, & faz o que quer, & o mesmo rei de Ixé lhe está sogeito, como se fora seu pai.

Depois de ordenado isto, elle cõ Xibatadono, & Iquenda, & Niuanogorozaimon repartirão os reinos, & as rendas delles como quiserão, & derão a Sanxichindono filho terceiro de Nobunãnga alem da renda que tinha, o reino de Minno, de q̄ elle ficou satisfeito, como quẽ pretendia ser senhor da Tenca. Fáxiba fez duas fortalezas logo mui fortes nos lugares de Yamazáqui, & Yauata tres legoas do Miáco, das quaes fabricas se tomarão muito Xibãta, & Sanxichindono, mandandolhe dizer que nos primeiros concertos ficauão iguaes, mas que segundo vião elle hia mostrando sinaes de se fazer senhor absoluto da Tenca, que logo as mandasse derribar, senão que passado o inuerno, elles o veriãõ destruir, respondeo lhe, que se pudessem esperaua por elles, & que no braço de cada hum se enxergaria quem era senhor da Tenca. Com esta reposta se declarou Sanxichidono por inimigo de Fáxiba, polo qual em Dezembro se partio de Guoquinái Fáxiba com grande exercito pera ir sobre Minno, & chegou ate por cerco a cidade do Guifu que muito bem podera entrar, e queimar se quisera, mas como Sanxichidono filho de Nobunanga se vio naquelle aperto, humilhouse, & pedio misericordia a Fáxiba entregandose em tudo em suas mãos: Fáxiba lhe perdoou o passado, tomandolhe em refens sua mãy, & sua filha, & os filhos dos velhos de sua casa, & juntamẽte o neto de Nobunanga, que elle ainda ali tinha, & se tornou com esta victoria pera o Miáco. Dali a hũ mes se declararãõ por seus inimigos duas pessoas mui principaes, o primeiro era Xibãta, que era seõor de tres reinos, conuem a saber Yechigen, Canga, Yéthcu, & Taquecaua, que fora grande capitãõ de Nobunanga, & estaua em hum estado mui forte, por nome Nagaxima, que Nobunanga tinha tomado por força darmas aos Itoçoxus.

Estaua na arraia do reino de Vómi, & de Yechigen hũia fortaleza, chamada Nagafãma, naqual Xibãta tinha posto per capitãõ hum seu filho perfilhado, por nome Ygadono, o qual tendo algũas causas



valente; Onde Faxiba vi stette attorno vn buõ pezzo, ma all'ultimo anchor qui per forza di mine pose quei di dentro in tanta paura, che parimente si resero salua la vita, dando però il Capitano morto in mano a Faxiba.

Fra questo mezzo Sanxeci spinto vn'altra volta da sfrenata voglia, & sciocca sperāza d'imperio, scordatosi dell'amor materno, & della figliuola, & de gli altri ostaggi dati a Faxiba, trattò di vnirsi con Xibata; ma pochi del Regno del Mino lo seguirono. Il che inteso Faxiba; raccolto lo essercito, senza dimora si andò a metter dentro il Regno del Mino, nella fortezza di Vogache, per andarsene di la sopra la Città del Ghifò. Alle frontiere di Gecigen lasciò quattro Capitani, con buona copia di eletti soldati, i quali Capitani furono Coicirò suo fratello, Iga lo adottiuo di Xibata, Xeifaò & Giusto. A 19. di Maggio la gente di Gecigen con la quale gia si era vnito Xibata, mosse in numero di quindici, o sedici mila persone, alla volta di Xeifeò, & Giusto, i quali all'apparir dell'inimico, fatto insieme consulta, & non hauendo piu di due mila persone, erano di parere diuerso. Xeifeò traportato da prosperi successi, uoleua in ogni modo con tanto disauantaggio cõbattere: A Giusto pareua temerità grande uscire in campagna con si poca gente; ma la pertinacia di Xeifeò, & la stima che Giusto faceua anch' egli di non parer timido, fù cagione che entrassero in battaglia, la quale per un grande spatio andaua quasi del pari; ma rinfrescandosi ad ogni hora i nemici, alla fine i Faxibani si posero in fuga. Xeifeò si ritirò nella sua Fortezza. Giusto cõ due, ò tre compagni (benche di poi se gli unirono molti altri) cõ somma difficoltà, & per speciale aiuto d'Idio, giūse alla Fortezza del fratello di Faxiba; Et Xibata uittorioso dato l'assalto a quella di Xeifeò, facilmente la prese, ammazzando lui cõ la maggior parte del presidio. Erano morti nella battaglia di prima due Cognati di Giusto, & suo Suocero, & molti nobili di Tacazuchi; ma la fama subitamente corse, tãto per lo Gochinai, come per Bongo, & per lo Ximo, che Giusto era stato tagliato a pezzi con la sua gente: Cosa, che apportò sommo dolore, & pianto a tutti i Fedeli di quelle parti, per esser' egli (come si è detto più uolte) la colõna

del Christianesimo. Et quantunque per lo più siano uere le male nuoue, piacque a nostro Signore, che questa si discoprisse per falsa, con uniuersale consolatione de'buoni.

Faxiba mettendosi in ordine per dar la battaglia a Sanxeci, intese il sinistro successo de i due Capitani sudetti, ma con tanta fortezza di animo, che nessuna mutatione gli apparue in uiso: anzi lasciati quiui diecimila soldati, uenne co'l resto dello essercito a cercare Xibata con si gran fretta, che per due giorni e due notti continouò di marciare, & a uista dell'inimico, si pose nel Forte di suo fratello, doue (come si è detto) si era ritirato Giusto, alquale fece molte carezze, ringratiandolo con parole onorate, & amoreuoli, del pericolo a che si era messo, & della gente che hauea perduto in suo seruitio.

All'apparire di Faxiba si ritiraua Xibata su'l monte doue si era prima accampato: & mandando Faxiba a dargli alla coda sei mila soldati, si attaccò una battaglia tanto crudele, che durò dalla mattina a buon'hora sino a mezzo giorno cõ incerta uittoria; ma finalmente uscendo in campagna tutto lo essercito di Faxiba, urtò con tanto impeto negl'inimici già stracchi, che del tutto li sbaragliò, & pose in fuga, & tenne loro dietro ne i folti boschi di modo, che i uinti lasciauano per strada le haste, gli archibugi, & le spade, & sino a i uestiti: Et in un tratto apparuero in cima del mōte più di mille cinquecento huomini mezzo ignudi.

Nella detta battaglia non si trouò Xibata, essendosi posto con più di mille huomini intorno alla Fortezza di Chiutarodono ad impedire quei di dentro, che nõ uscissero in aiuto de gl'inimici. Onde Faxiba auuisato come tuttauia restaua in piedi il suo principale auuersario, fatto sonare a raccolta, volò lo essercito contro a lui. Et esso fuggendo per vie strette, & difficili, peruenne con pochi de' suoi alla Città principale di Gecigen, che si chiama Chitanoxo, nella quale era vna Rocca bellissima coperta di tegole di pietra tanto lisce, & ben lauorate, che pareuano fatte al torno; ma innanzi di entrarui diede fuoco alla Citta, affine che gl'inimici non si valessero delle vettouaglie, & delle ricchezze che vi erano. Il resto de' fuggiti si



	PAGE
Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. ( <i>Cf. Japanese Materials, 5 moon 12<sup>d</sup> day, TENSHO-XI.</i> ) .....	18
IX. Avvisi del Giapone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. ( <i>Cf. Japanese Materials, 5 moon 15 day, TENSHO-XI.</i> ) .....	19
X. Avvisi del Giapone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. ( <i>Cf. Japanese Materials, 8 moon 1<sup>st</sup> day, TENSHO-XI.</i> ) .....	20

## DAI NIPPON SHIRYO

*(Japanese Historical Materials)*

PART XI. VOLUME IV.

European Materials

## I.

AVVISI DEL GIAPONE DE GLI ANNI M.D.LXXXII.,  
LXXXIII. ET LXXXIV. ROMA, M.D.LXXXVI.

Pp. 112-116.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of  
the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584.

AVVISI DELL'OTTANTATRE.

[*Extract*]

Innanzi che la detta fortezza si rendesse, hauea Tachecaua sollicitato Xibata, che mentre Faxiba staua occupato seco, non perdesse la occasione di entrar con la sua gente nella Tenza, Onde Xibata senza perder tempo spedi à quella uolta un suo nipote per nome Sacuma, famoso Capitano con sette, ò otto mila soldati, & egli co'l resto della gente seguiua. Sacuma sene venne diritto uerso Nagafama, doue staua lo adottiuo di Xibata, ma quando arriuò gia la fortezza di Cameiano era in mano dell' inimico, il quale intesa la uenuta di Sacuma, diuiso lo essercito, mādò contro a lui intorno a uenti mila persone, & quindici mila ne lasciò sopra una fortezza di Tachecaua, chiamata Minè. Quelli che andarono incontro a Sacuma, fecero nel camino cinque, ò sei forti, per sorti, per impedire il passo a i soccorsi che ueniuan da Igen, i quali s'accamparono sopra vn monte a vista de' Faxibani, in vn buon sito, & che non poteua essere assediato.

La sudetta fortezza di Minè oltre di essere grande & bene intesa, era anco molto munita di gente, & di vettouaglie, & il Capitano era





昭和六年十一月十七日印刷  
昭和七年四月二十日發行

(大日本史料第十一編之四奥付)  
豫約價金七圓

編輯者兼  
發行者

東京帝國大學

印刷者

西濃印刷株式會社岐阜支店

發行所

東京帝國大學文學部  
史料編纂所

電話小石川(85)七〇二番  
四〇二番

CONTENTS.

	PAGE
I. Avvisi del Giappone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 4 moon 21 day, TENSHO-XI.) .....	1
II. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da companhia de Iesus.—Carta do padre Luis Froes pera o padre Alexandre Valegnano, provincial da India, de Nangaçãqui, aos vinte de Janeiro, de 1584 annos. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 4 moon 21 day, TENSHO- XI.) .....	4
III. Avvisi del Giappone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 4 moon 24 day, TENSHO-XI.) .....	13
IV. P. Crasset, Histoire de l'eglise du Japon. Volume I. Livre VIII.....	14
V. A. Montanus, Ambassades mémorables de la Compagnie des Indes Orientales des Provinces unies, vers les Empereurs du Japon. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 4 moon 24 day, TENSHO-XI.) .....	15
VI. Avvisi del Giappone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 5 moon 2 day, TENSHO-XI.) .....	16
VII. Segunda Parte das Cartas de Iapão que escreuerão os padres, & irmãos da Companhia de Iesus.—Carta do P. Luis Froes pera o padre Alex- andre Valegnano, Provincial da India, de Nangaçãqui, aos vinte de Janeiro, de 1584 annos. (Cf. <i>Japanese Materials</i> , 5 moon 6 day, TEN- SHO-XI.) .....	17
VIII. Avvisi del Giappone degli anni M.D.LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV. —Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Society of	



東京帝國大學  
 圖書部  
 西園寺閣下  
 大正十一年八月

大日本史料  
 大日本古文書

既刊目錄

(昭和七年)

- 第一編(平安時代) 第一卷至第七卷 宇多天皇仁和三  
年八月ヨリ 朱雀天皇天慶四年八月ニ至ル 七册
- 第二編(平安時代) 第一卷至第三卷 一條天皇寬和二年六月ヨリ 長保二年九月ニ至ル 三册
- 第三編(平安時代) 第一卷至第四卷 堀河天皇應德三年十一月ヨリ 承徳元年十二月ニ至ル 四册
- 第四編(鎌倉時代) 第一卷至第十六卷 後鳥羽天皇文治元年十一月ヨリ 仲恭天皇承久三年七月ニ至ル 十六册(完)
- 補遺(別冊一) 建久四年正月ヨリ 建仁三年十二月ニ至ル 一册
- 第五編(鎌倉時代) 第一卷至第八卷 後堀河天皇承久三年七月ヨリ 後醍醐天皇福元年五月ニ至ル 八册
- 第六編(建武中興及南北朝時代) 第一卷至第廿五卷 後醍醐天皇元弘三年五月ヨリ 後村上天皇正平三年七月ニ至ル 廿五册
- 第七編(室町時代) 第一卷至第三卷 後小松天皇明德三年十月ヨリ 應永六年六月ニ至ル 三册
- 第八編(室町時代) 第一卷至第十五卷 後土御門天皇應仁元年正月ヨリ 後光明天皇永正五年六月ニ至ル 十五册
- 第九編(室町時代) 第一卷至第二卷 後柏原天皇永正五年六月ヨリ 同七年十二月ニ至ル 二册
- 第十編(安土時代) 第一卷至第二卷 正親町天皇永祿十一年八月ヨリ 同十二年六月ニ至ル 二册
- 第十一編(桃山時代) 第一卷至第四卷 正親町天皇天正十年六月ヨリ 同十一年八月ニ至ル 四册
- 第十二編(江戸時代) 第一卷至第三十卷 後陽成天皇慶長八年二月ヨリ 後水尾天皇元和五年六月ニ至ル 三十册











